

消費者購買行動モデルの時間的拡張

田畑 智章

1 はじめに

近年、消費者の多様化・個性化が進み、企業におけるマーケティング活動ではこのような消費者の商品・サービスを選択し購買する行動の構造を明確に把握することが今まで以上に重要な課題となってきた。

消費者が知覚した選択対象に対して購入の意思を持つために形成される好ましさの度合いを選好（度）というが、マーケティング活動における選好分析の目的とは、購入を決定するための影響要因を探ることにある。

従来この分野では、Howard-Sheth（1979）による購買行動の概念モデルをもとに、確定的効用モデルや確率的効用モデルなど様々なモデルが提案されている。また、それらを応用した選好分析の手法としても、プロフィールと呼ばれる仮想的対象を物理的、機能的属性から選好を測定しようとするコンジョイント分析をはじめとして数多く提案され、現場利用されている [1]。

しかし、消費者が商品・サービスを選択し購買に至るまでの過程において、たとえば車など比較的気軽には購入できないような商品の場合、その意思決定過程が長時間に渡ることはむしろよくあることである。その意味で選好は本質的には動的なものと思われる。選好を動的に扱うことは、長期的にセールス・プロモーションを行う上では非常に重要なことからであるが、従来の手法ではある時点における選好（度）は測定できるものの、その移り変わりを記述している研究はあまり見られないのが現状である。

そこで本研究では、観察期間内における消費者選好の移り変わりに対して、選好形成過程のモデルを提案し、長期的なセールス・プロモーション戦略策定の一助となることを目的とする。

2 消費者選好の分析

2-1 Howard-Sheth モデル

マーケティングにおける消費者行動のモデルには、行動諸科学の分野における成果を援用・適用したものが多く見られる。中でも、HowardとShethは、消費者の購買に至るまでの過程を構造化し（図1）、消費者行動の概念を包括的に規定した [2]。彼らは、観察可能な購買行動に対して、その背後にある観察の困難な要因を明示的に構造化したが、このような枠組みの提示は諸研究を位置づける基準点として、後の研究に大きな影響を与えている。

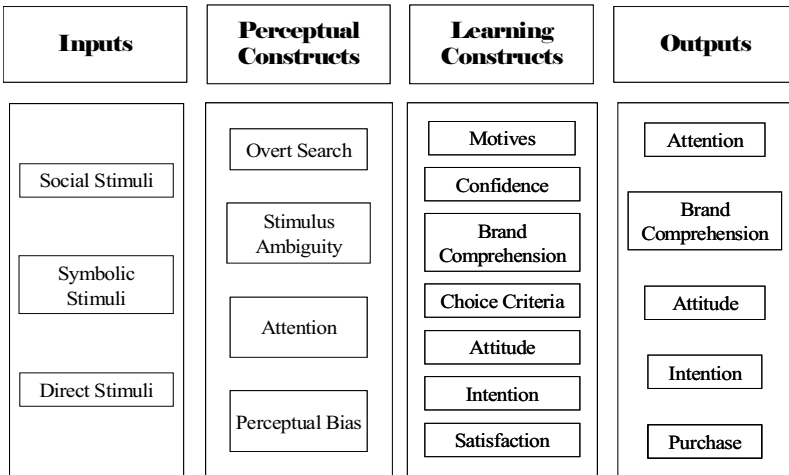


図 1 Howard-Sheth Model

消費者行動の包括的研究は、この後主にHoward-Shethモデルの経験的妥当性のテストとして進められてきている。具体的には、図1におけるPurchaseに対する要因を測定可能な変数として捉え、それらの関係を基本的には線形モデルにより記述し、最小二乗法もしくは最尤法などでパラメータ推定を行っている。次節以降でその主な例を挙げる。

2-2 部分構造明示型モデル [1]

2-2-1 多属性態度モデル

Howard-ShethモデルにおけるOutputレベルの「Brand Comprehension」から「Purchase」までの部分を特に明示的に構造を表しているものを部分的構造明示型モデルという。すでに認知された製品の中でどのような選択がなされるかを記述するモデルであり、消費者の選択に直接関係する属性の探求はそのまま製品コンセプトの形成に役立てることができるので、現在多く利用されている。

部分的構造明示型モデルの中で基本となるのが、社会心理学におけるFishbeinの「期待－価値」理論から発展したMulti-Attribute Attitude Model (多属性態度モデル) である ([3] 他)。 U_j を選択対象 j に対する態度、 $z_{1j} \cdots z_{nj}$ を対象 j に対する n 個の属性の評価、 $a_1 \cdots a_n$ を属性に対する重み(重視度)とすると、基本構造は以下のように表すことができる。

$$U_j = a_1 z_{1j} + a_2 z_{2j} + \cdots + a_n z_{nj} \quad (1)$$

この場合、 z および a のデータから U を決定するので、主観的作用が大きくなり、予測力が低いという問題をもつ。しかしながら選好構造に対しておおまかな枠組みを与えるものとしては有効である。

2-2-2 アイデアル・ベクトル・モデル

多属性態度モデルが z および a のデータから U を決定するものであるのに対し、属性の評価 (z) とその時の選択データ (U) から a を推定するというアプローチが考えられる。そのうちの1つがアイデアル・ベクトル・モデルである。アイデアル・ベクトルとは、個々の消費者からみて理想的な属性の組み合わせの方向性を表すものである。加法モデルにより、属性が r 個ある場合に対象 j についての効用 U_j は、

$$U_j = \alpha_1 (\text{対象 } j \text{ の属性 } 1 \text{ の水準}) + \dots + \alpha_r (\text{対象 } j \text{ の属性 } r \text{ の水準}) \quad (2)$$

と規定される。ここで、その n 個の対象についての購入したい順序が与えられたとき、 U_j の大きさの順序がデータの順序にできる限り一致するようにパラメータ $\{\alpha_1, \dots, \alpha_r\}$ を定めるものである。そのパラメータ導出法に関しては、PREFMAP や RANKLOGIT などが利用可能である。

2-2-3 アイデアル・ポイント・モデル

アイデアル・ベクトル・モデルにおいては、属性水準と効用の関係が比例関係になっており、たとえば「甘さ」など属性によっては過ぎてしまうと効用の下がるものが存在する。この点を考慮に入れたのが、アイデアル・ポイント・モデルである。

このモデルもアイデアル・ベクトル・モデルの場合と同じように、消費者の選好順序データが与えられると、プロダクト・マップ上の各対象の点からの距離の近さがそれに合うように理想点の位置が定められる。

$$U_j = [\alpha_1 \{(\text{対象 } j \text{ の属性 } 1 \text{ の水準}) - (\text{属性 } 1 \text{ の理想水準})\}^2 + \dots + \alpha_r \{(\text{対象 } j \text{ の属性 } r \text{ の水準}) - (\text{属性 } r \text{ の理想水準})\}^2]^{1/2} \quad (3)$$

2-2-4 確率効用モデル

各対象に対する選好の水準が確率的に定まり、それが最大となる対象が選択されるとするモデルである。この場合、対象 j についての効用 U_j は、確定的効用(V_j)と誤差要因(ε_j)の和として表現され、その誤差要因の分布形により数種類の方法が存在する。

$$U_j = V_j + \varepsilon_j \quad (4)$$

中でも特に、 ε_j について第一種極値分布(二重指数分布)を仮定すると、選択確率が以下のような極めて扱いやすい形で求められる。このタイプを多項ロジット・モデルと呼び、現在の選好分析ではもっともよく利用されていると思われる。

$$P_j = \frac{\exp(bU_j)}{\sum_{j=1}^n \exp(bU_j)} \quad (5)$$

3 本研究の提案

3-1 概要

従来のモデルは、ある一時点における選好を表すのみであった。しかしながら、消費者は時間経過により態度が変容すると考えられる [4]。

たとえば、比較的高額な商品(耐久消費財等)の場合即座な購入でない場合が考えられるが、そのようなケースでは迷っている間に興味の転移であるとか、流行による価値の減少など最終的な選択に影響を与える要因に変化が見られ、選好に差異が見られることが考えられる(図2)。従来のモデルにおいては、この態度の変化を確率的に効用が変化するとして処理をしていたが、これを決定論的に捉えることも有用であろう。

この問題に関しては、水野 [4] 等が必要性を説いてはいるものの、具体的なマーケティング・モデルとして提案されているものは未だ見受けられない。

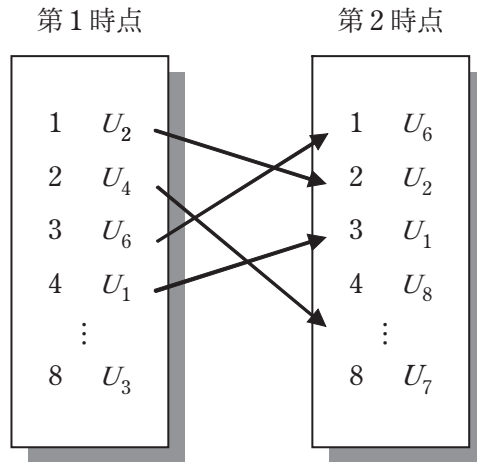


図2 選好順序の移り変わり

そこで、このような選好の変化を説明するために、効用の加法モデルに基づいた選好形成過程モデルを検討する。基本的なアイデアとしては、加法モデル（多属性態度モデル）で用いられている変数を時間の関数と考えてその変化を微分方程式モデルとして記述するものである。その際、誤差要因（確率効用モデル）は考えないこととする。

3-2 仮定

- 対象とする財は主に耐久消費財とする
- 対象に対する選好は消費者の（主観的な）属性の評価とその重み（重視度）によって定まる（加法モデル）
- 消費者の選好は時間によって変化する

- 属性評価に対する重みも時間変化する
- 重視度の変化は選好の変化の仕方に影響を与え、また、同時に選好の変化は重視度の変化の仕方に影響を与えている
- 対象に対する選好の度合いは (もし何もしなければ) 自然な減少を伴う (限界効用逓減の法則とのアナロジー)

3-3 使用記号

$U_{ij}(t)$: t 時点での消費者 i の対象 j に対する選好

z_{ijk} : 消費者 i の対象 j における属性 k に対する評価

$a_{ik}(t)$: t 時点での消費者 i の属性評価 z_{ijk} に対する重み

h_{ikj} : $U_{ij}(t)$ から $a_{ik}(t)$ にフィードバックされる際にかかる係数

w_{ij}, γ_{ik} : 自然な減衰を表すパラメータ

F_{ij}, Γ_{ik} : 外部刺激

i : 消費者個体 (1, 2, 3, ..., L)

j : 選択対象 (1, 2, 3, ..., M)

k : 属性 (1, 2, 3, ..., N)

3-4 モデル式

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}U_{ij}(t) &= -w_{ij}U_{ij}(t) + \sum_{k=1}^N a_{ik}(t) z_{ijk} + F_{ij} \\ \frac{d}{dt}a_{ik}(t) &= -\gamma_{ik}a_{ik}(t) + \sum_{j=1}^M h_{ikj}U_{ij}(t) + \Gamma_{ik} \end{aligned} \quad (6)$$

$$(i = 1, 2, 3, \dots, L; j = 1, 2, 3, \dots, M; k = 1, 2, 3, \dots, N)$$

ある選択対象 j (1, 2, 3, ..., M) が存在し、そのそれぞれに対して消費者 i (1, 2, 3, ..., L) は各属性 k (1, 2, 3, ..., N) から評価を与え

る。与えられた評価は、ある割合（重み： a_{ik} ）をもって総和され、それが次時点における消費者の選好（ $U_{ij}(t)$ ）に影響を与える。消費者の選好は、（何のインプットもない状態ならば）時間とともに減衰していくと考えられるが、広告や他人からの忠告など外部からの影響が与えられる場合もある（ F_{ij} ）。

評価に対する重み（ a_{ik} ）は、選好（ $U_{ij}(t)$ ）によって影響を与えられることがあるだろう。その時にはある割合（ h_{ikj} ）をもって次時点での重み（ a_{ik} ）に変化を及ぼすであろう。また、 a_{ik} についても時間とともに減衰していく性質があり、強制的にある属性に注目させられる場合もあると考えられる。

4 数値例

4-1 選好の測定

選好の順序関係が与えられたときに、各属性の相対重要度およびその各水準の効用値を推定するもので、いくつかの属性間の各水準を組み合わせたプロフィール・カードを用い被験者の選好順位に関する応答に基づいて各属性に対するそれぞれの水準の効用値を分解的に算出する。

4-2 パラメータの推定

選好（ $U_j(t)$ ）と属性に対する重み（ $a_i(t)$ ）の微分方程式で記述される前述のモデルを、外部刺激はないものとして時間値 t の差分方程式の形で表すと次のようになる。

$$\begin{aligned}
 U_j(t+1) &= c_j U_j(t) + \sum_{i=1}^N a_i(t) z_{ij} \quad (c_j = 1 - w_j) \\
 a_i(t+1) &= \lambda a_i(t) + \sum_{j=1}^M h_{ij} U_j(t) \quad (\lambda_i = 1 - r_i)
 \end{aligned}
 \tag{8}$$

ここで、 $\lambda_i=0$ とすると

$$U_j(t+2) = c_j U_j(t+1) + \sum_{i=1}^N \left(\sum_{j=1}^M h_{ij} U_i(t) \right) \quad (9)$$

となるので、複数時点における選好度 ($U_j(t)$) が測定できれば交互最小二乗法によってパラメータ (c_j) と (h_{ij}) を推定することができる。

4-3 適用例

CPU, メモリ, HDD容量の3属性を評価基準とするパソコンを対象製品とし、6製品のスペックについてのアンケートによって製品の選好順位を得る。都内在住の大学生男女50人を調査対象とし、繰り返し3回のアンケートを実施した(1999年1月から2月にかけてコンジョイント分析で用いるプロファイル・カードをPC上に提示する形でデータ採取)。対象商品とサンプルの一例を以下に示す。なお、このデータはおよそ10年ほど前のアンケートデータであるが、消費者の選好構造に変化があるわけではないので問題なく適用可能である。

表1 対象となるパソコンのスペック

製品	CPU	メモリ	HDD 容量
1	MMX Pentium 200Hz	96 MB	3.2 GB
2	MMX Pentium 233Hz	64 MB	3.2 GB
3	MMX Pentium 233Hz	96 MB	2.1 GB
4	MMX Pentium 266Hz	32 MB	4.0 GB
5	Pentium II 233Hz	32 MB	3.2 GB
6	Pentium II 233Hz	64 MB	2.1 GB

表2 製品の選好度の一例

回数	製品1	製品2	製品3	製品4	製品5	製品6
1	60.855	107.81	142.14	177.88	258.64	215.94
2	48.327	89.732	184.53	121.44	238.47	292.47
3	6.0437	104.14	124.47	211.17	173.62	245.95

図3の例では、製品5→製品6→製品6という3時点における実測値の変化と理論的な解の軌道とが一致していることがわかる。

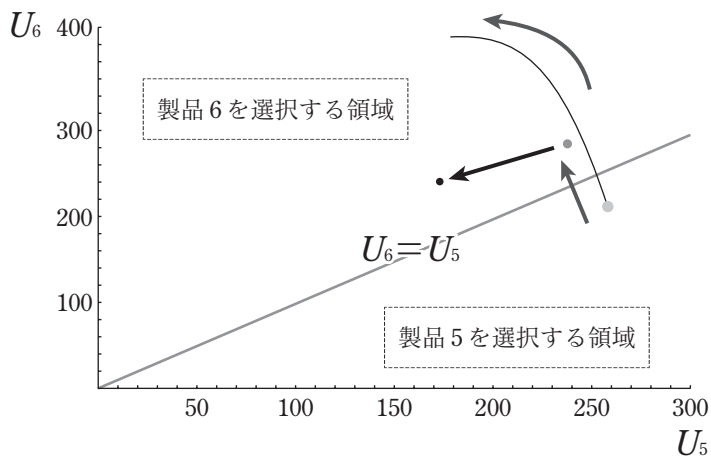


図3 時点における選好の移り変わり

このように2つの製品についてどちらの選好が高いかをサンプル全体について比較した場合、理論値と実測値が適合している割合は

$$\frac{K}{S \times {}_6C_2 \times (T-1)} = \frac{1011}{50 \times 15 \times 3 \times 1} = 0.6740$$

K : 選好の変化が一致する数

S : サンプル数

${}_6C_2$: 6製品から2製品をとる組み合わせ

T : 時点の数

であった。ここから、およそ70%の適合性が得られたことにより、本研究の提案方法は消費者の選好過程を十分に表しているものと思われる。

5 結論と今後の課題

本研究では、それまでの一時点のみの選好関係を表していたモデルに対し、時間的な拡張を行った。それにより、消費者選好の移り変わりを説明することが可能となった。このモデルを用いることによって、今後は動的なマーケティングを定量的に行っていくことができよう。すなわち、たとえば割引戦略に対して一定率で割り引いていく戦略が購買率向上につながるのか、だんだんと逡増的に割り引いていく方法が効果があるのか判断できよう。

今回は多属性態度モデルをベースとして時間的な拡張を行ったが、やはり確率効用モデルとしての時間的拡張も行わなければならない。その際には確率変数を確率過程へと拡張させなければならないが、今後はこの確率過程の特定が非常に重要になるであろう。

参考文献

- [1] 片平秀貴：『マーケティング・サイエンス』，東京大学出版会，1987
- [2] J. A. Howard and N. Sheth: *The Theory of Buyer Behavior*, John Wiley & Sons, Inc., 1969
- [3] Martin Fishbein (Eds.) : *Readings in Attitude Theory and Measurement*, John Wiley and Sons, 1967
- [4] 水野誠：「消費者選好の進化—経験的研究が示唆するもの—」，進化経済学会第6回大会予稿集，2002

就職活動に対する自己効力感尺度^{1), 2)}

— 項目分析と対象者間比較 —

太田さつき／田畑智章／岡村一成

研究の背景

景気回復に伴い、新規学卒者の就職率は上昇しているものの、大学卒業後フリーターになる者の比率は10年前と比べて依然増えている。新卒後に正社員に登用されないと、技術や知識を高めることができず、フリーターから抜け出すのが難しくなる。そのため、2021年にはフリーター人口が現在の3倍に増え、大きな経済的損失を招くと懸念されている（財務省財務総合政策研究所，2006）。こうした問題は、新卒後正社員として就業することの重要性を示唆している。

大学生は企業の採用スケジュールに合わせて、一定期間中に就職活動を行わなければならないが、近年の学生は内定取得の時期が遅れると就職活動自体を止めてしまう傾向にある（内閣府，2003）。こうしたことより、内定取得に至るまで粘り強く就職活動を行えるよう、大学としても学生を支援していく必要性が考えられる。そのためには、就職活動に対する意欲や粘り強さ、活動レベルに関係する心理的要因をとらえ、それがどのように育成されるのかを探ることが必要となろう。それにより、育成を促進する手立てを考えることが可能となるからである。本研究では、そうした心

1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第47回大会（2006）にて発表された。

2) 本研究は平成18年度東京富士大学共同研究費を受けて行われた。

理的要因となりうる構成概念として、「就職活動に対する自己効力感」を取り上げた。

「就職活動に対する自己効力感」とは

自己効力感

自分が行為の主体であると確信していること、自分の行為について自分がきちんと統制しているという信念、自分が外部からの要請にきちんと対応しているという確信が「自己効力感」である（松田，1999）。困難や失敗に直面した時に自分では事態を変えられないと考えて対処をせず、運命に身を委ねてしまう状態が、自己効力感の低い状態である。逆に困難に直面しても、自分でそれを取り除いたり、乗り越えたりできると強く信じている状態が自己効力感の高い状態である。人は、それが自分にできると確信できるから、達成できた状況を予測して目標を設定し、その目標に向けて努力を投入することが可能となる。できると思えなければ、そもそも自発的に行動を起こすことすらしないはずである。このように、自己効力感、動機づけの強さやそれに伴う行動の水準に決定づける重要な要因となる（Bandura, 1977）。

自己効力感を育てる源となるのは、「熟達経験」、「代理体験」、「他者からの説得」、「生理的・感情的状態」の4つであると考えられている（Bandura, 1995 本明他訳 1997）。

過去にやり遂げて成功した経験、つまり「熟達経験」があることは、最も強力に自己効力感を育てる。過去にできたのならば、次もできるはずと確信できるわけである。しかし、初めて取り組むことに対しては、熟達経験はない。それに代わるのが「代理体験」である。自分と同じような人々が努力して成功するのを見ることは、それを見た人々に「自分にもできる」という自信をもたらす。手本となる人が自分に似ていれば、その効果は更

に高まる。「あなたにはそれができる」という激励、つまり「他者からの説得」も自己効力感を高める方法の一つとなる。しかし、説得されて実行し、うまくいかなかった場合は自分の力に不信を抱くことになるという問題もある。また、自己効力感とは人々の「生理的・感情的状態」からも、少なからぬ影響を受ける。疲労や痛み、ストレスや緊張が強いと自己効力感を高めることは困難となる。

こうした自己効力感の源は、操作することが可能である。そのため、自己効力感とは学業成績の改善や依存症の治療、HIV感染の予防など様々な教育場面に応用され、効果を上げている (Bandura, 1995 本明他訳 1997)。

就職活動に対する自己効力感

上述の「自己効力感」を就職活動に応用したのが、「就職活動に対する自己効力感」である (太田・岡村, 2006)。正社員に採用されるためには、不安にうまく向き合いながら、いくつもの関門を乗り越え、最後まで諦めず努力する必要がある。内定取得の時期が遅れると就職活動自体を止めてしまうという傾向は (内閣府, 2003)、就職活動に対する粘り強さの不足とも考えられる。太田・岡村は、こうした就職活動に自己効力感の概念を適用することにより、大学生の就職活動の支援方法を考案することが可能と考え、それを測定する尺度として「就職活動に対する自己効力感」尺度を作成した。そして、短期大学の2年生122名を対象に調査を行い、就職活動に対する自己効力感の高い学生は低い学生に比べて、就職活動に投じる努力量が多く、就職活動に早期から取り組み、多くの企業を受験し、内定の取得率が高いことを見出した。また、就職活動に対する自己効力感の高い学生は低い学生よりも、就職活動に対する満足感も高いことが確認された。これらのことから、太田・岡村は、就職活動に対する自己効力感尺度の予測妥当性が確認できたと判断している。また、就職活動に対する自己効力感を高めることが、学生の就職活動を活発化し、満足のいく就職先

を決める上で重要であると述べている。

しかし、上記の研究の対象者は短大生であり、一つの短期大学に所属する学生のみを対象としていたために、その結果が四年制大学の学生に対して、一般的に活用できるかどうか明らかではない。また、同尺度には質問項目によって異なる回答方法を用いていた箇所があったため、回答傾向に影響を及ぼした可能性があったことを、太田・岡村(2006)は指摘している。さらに、対象を四年制大学の学生にまで拡張した場合、就職活動内容も拡張されるであろう。従って、多岐にわたる学生の行う活動をとらえられるよう工夫する必要がある。

目 的

本研究では、上述の回答方法の問題を除去し、多岐にわたる就職活動内容を含むことができるよう、太田・岡村(2006)の「就職活動に対する自己効力感尺度」を改訂した。そして、改訂した尺度を用いて、複数の四年制大学の学生を対象に調査を実施し、その回答を分析した。

まず、尺度に含まれる一つ一つの質問項目に対する回答傾向をみることによって、尺度項目の特徴と弁別力を検討した。信頼性についても確認を行った。次に、回答者を性別や学年、進路希望、所属大学といったサブグループに分割して各項目の平均値を比較した。回答者の特性の違いによって、各項目に対する反応の仕方がどのように異なるのか検討することにより、各項目の特徴を把握し、尺度の弁別力について検討するためである。最後に、就職活動を終了した学生を対象に、各尺度項目といくつかの就職活動水準をとらえる指標との関係をみることによって、尺度の予測妥当性について若干の検討を加えた。

方 法

対象者

対象は、大学4年生および3年生である。4年生はA大学を対象とし、3年生はA大学、B大学、C大学、D大学、E大学、F大学を対象とした。対象学部は社会科学系に統一した。

4年生については、A大学の昼間部に所属する全学生を対象とし、就職活動に対する自己効力感を尋ねる調査を年度開始時に行い、就職活動経験を尋ねる調査を卒業時に実施した。

3年生については、就職活動に対する自己効力感を尋ねる調査のみを実施した。A大学については昼間部に所属する全学生を対象としたが、その他の大学については、協力を承諾した教員を通じて担当するゼミ生を対象に調査票を配布した。

その結果、4年生については第1回目調査に対して110名、第2回目調査に対して100名から回答を得た。3年生については442名から回答を得た。回答者の属性はTable 1の通りである。

4年生は、2回の調査を通して、男子が75%前後、女子が25%前後と、男子の割合が高い。進路希望では、就職希望が8割であったが、未定と回答した者も15%と1割以上存在した。

3年生については、6つの大学から協力を得たが、各大学の人数にばらつきがある。全体では男子68%、女子31%と、4年生と同様に男子の割合が高い。しかし、参加者数が少ないものの、D大学とE大学はそれぞれ女子の割合が62%、81%と多かった。進路希望については、全体の77%が就職希望で17%が未定者であり、4年生とあまりかわらない。しかし、大学によってその割合は異なり、A大学の場合、未定者が26%と4分の1を超えていた。

Table 1 回答者の属性

性別	4年生 (A 大学)		3年生						3年生計
	1回目	2回目	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学	E 大学	F 大学	
男 子	82 (74.5)	76 (76.0)	124 (81.0)	58 (63.0)	83 (64.3)	8 (38.1)	3 (18.8)	24 (77.4)	300 (67.9)
女 子	28 (25.5)	23 (23.0)	28 (18.3)	30 (32.6)	46 (35.7)	13 (61.9)	13 (81.3)	7 (22.6)	137 (31.0)
進路希望									
就 職	88 (80.0)	-	107 (69.9)	72 (78.3)	109 (84.5)	18 (85.7)	14 (87.5)	22 (71.0)	342 (77.4)
進 学	4 (3.6)	-	5 (3.3)	1 (1.1)	4 (3.1)	1 (4.8)	0 (0.0)	6 (19.4)	17 (3.8)
未 定	16 (14.5)	-	39 (25.5)	15 (16.3)	15 (11.6)	2 (9.5)	2 (12.5)	3 (9.7)	76 (17.2)
未記入	2 (1.8)	-	2 (1.3)	4 (4.3)	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (1.6)
計	110 (100.0)	100 (100.0)	153 (100.0)	92 (100.0)	129 (100.0)	21 (100.0)	16 (100.0)	31 (100.0)	442 (100.0)

単位：人、()内は%

調査時期

大学4年生対象の調査は、担当教員に依頼し、2006年4月の最初のゼミ時間において、進路選択に対する自己効力感を尋ねる調査を実施した。4年生については、2007年3月の卒業式の日、就職活動水準を問う追跡調査を行った。追跡調査は、作成した尺度の予測妥当性を確認するためである。

大学3年生対象の調査は、2006年9月～10月の秋学期最初の授業時間に行うよう担当教員に依頼した。就職活動に対する自己効力感を尋ねるものである。授業時間の進行具合によって必ずしも秋学期初回の授業に実施することはできなかったが、10月中には全ての回答を回収した。

調査測度

就職活動に対する自己効力感 太田・岡村 (2006) の尺度に若干の修正を加えた。Bandura (1977) は自己効力感を、ある行動がとれるという「効力感期待」とその行動が結果に結びつくという「結果期待」に分類したことから、太田・岡村は「就職活動に対する自己効力感尺度」につ

いても、同様に「効力感期待」と「結果期待」を取り入れた。その際、「効力感期待」を尋ねる項目に対しては、「自信がある」程度で回答をもとめ、「結果期待」を尋ねる項目に対しては、「そのとおり」と感じる程度で回答を求めている。太田・岡村は、この回答の仕方の違いが、因子分析の結果や信頼性係数の算出に影響した可能性があるとして指摘していたため、本研究では、被調査者が全ての項目に対して、同じ回答形式でこたえられるよう改訂した。

短大生だけでなく大学生が経験する多様な就職活動内容を含むこと、また、理解が容易で回答がしやすくなることを念頭におき、言い回し等を修正した。こうして作成されたのが、Table 2に示された23項目からなる尺度である。全ての質問項目に対して、「1:まったくあてはまらない」から「5:よくあてはまる」まで5件法で回答をもとめた。

就職活動水準 4年生に対しては、2007年3月の卒業時に、尺度の予測妥当性を確認するために就職活動水準を尋ねる追跡調査を行った。就職活動に対する自己効力感の高い者ほど、早くから就職活動に着手し、多くの企業に挑戦したかどうかを確認するためである。また、就職活動に対する自己効力感の高い者ほど、就職活動に努力を投じ、その結果に満足したかどうかを確認するためである。

就職活動に関わる個別の行動として、①インターネット上の就職活動サイトへの登録、②企業説明会への参加、③エントリー、④面接試験の受験について取り上げ、それらの開始時期を尋ねた。その回答から、調査を実施した2007年度3月時点から何ヶ月前に開始したかを算出し、その値を分析に使用した。

また、①説明会への参加企業数、②履歴書提出企業数、③筆記試験受験企業数、④面接就職受験企業数、⑤内定取得企業数について尋ねた。更に、就職活動に投入した努力量についても、「1:非常に努力不足」から「5:非常に努力した」まで5件法で尋ねた。就職活動に対する満足度について

は、「1：とても不満」から「5：とても満足」まで5件法で尋ねた。

Table 2 全対象者の回答の基礎統計量

	平均	SD	GP分析			項目- 全体 点相関	α係数 ^{注2}	歪度	尖度
			上位群 平均	下位群 平均	t値 ^{注1}				
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.24	0.84	4.64	3.78	8.07	.33	.87	-1.35	2.25
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	3.90	0.89	4.39	3.26	10.90	.41	.87	-.064	0.11
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.42	1.06	3.99	2.83	9.19	.31	.87	-0.34	-0.52
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.61	0.97	4.12	2.94	10.34	.40	.87	-0.43	-0.16
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.13	1.09	3.75	2.49	10.58	.35	.87	-0.06	-0.72
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	3.06	1.00	3.64	2.37	11.10	.41	.87	-0.11	-0.34
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	3.35	1.06	4.10	2.59	13.50	.50	.87	-0.38	-0.41
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	3.04	1.22	3.81	2.32	10.83	.42	.87	-0.06	-0.97
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.23	1.17	3.86	2.68	8.73	.33	.87	-0.20	-0.83
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.37	1.08	4.00	2.62	11.34	.42	.87	-0.43	-0.37
11 できるだけ多くの企業説明会（セミナー）に参加することができると思う	3.39	0.99	4.00	2.65	12.41	.45	.87	-0.39	-0.23
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	3.03	1.06	3.85	2.23	14.55	.56	.87	-0.05	-0.48
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.54	1.06	3.24	1.87	11.31	.46	.87	0.29	-0.55
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.55	0.96	4.13	2.75	12.65	.49	.87	-0.55	0.25
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.31	1.00	4.09	2.39	17.40	.60	.87	-0.20	-0.42
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.40	1.00	4.07	2.56	13.56	.55	.87	-0.26	-0.32
17 自分の興味を把握することができると思う	3.71	1.00	4.32	3.00	11.67	.48	.87	-0.66	0.13
18 自己の持ち味・能力をいかにせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.31	1.01	4.09	2.42	16.19	.61	.87	-0.22	-0.17
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.28	0.98	4.04	2.41	16.48	.60	.87	-0.16	-0.16
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.35	1.01	4.10	2.44	16.41	.59	.87	-0.28	-0.27
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.94	0.95	4.50	3.34	10.76	.41	.87	-0.83	0.51
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.91	0.94	4.44	3.45	9.42	.36	.87	-0.71	0.31
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	3.67	1.07	4.29	3.04	9.95	.40	.87	-0.58	-0.18

注1：全ての項目において上位群と下位群との間に.001%未満で有意差あり

注2：その項目を除外した時のαの係数

結果と考察

尺度項目に対する回答の特徴

Table 2は、調査対象者全員の基礎統計量を示す。各項目の平均値をみると、「1. 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う」の値が4.24と極めて高い。標準偏差は0.84と低い傾向にあるため、この項目に対しては、多くの被調査者が「4=だいたいあてはなる」または「5=よくあてはまる」と回答していたことになる。歪度が-1.35と他の項目に比べて明確に0から離れてマイナスの値を示していたことから、右側に偏った分布にあることが分かる。度数分布を確認したところ、4を選択した者が44.2%、5を選択した者が42.8%と、87%が4または5を選択していた。このことから、就職活動に関する情報を得るために様々なメディアを利用することに対しては、対象となった大学生のほとんどが高い効力感をもっていることがうかがえる。

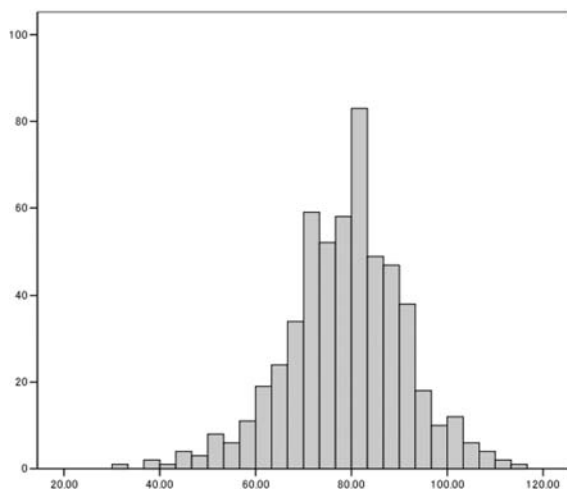
比較的平均値の高かった項目として他には、「21. 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う」(3.94)、「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かれば、よりよい就職ができると思う」(3.91)、「2. 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う」(3.90)が上げられる。自己理解や就職活動の知識があればよい就職ができ、多少の困難があっても活動を続けられると多くの者が考えていることになる。これらの項目については、平均値は高かったものの、標準偏差は十分あり、弁別力を備えていると判断した。

比較的平均値が低かったのは、「13. エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う」で、中央値の「3=どちらでもない」よりも低い2.54であった。多くの学生にとって書類を書くのは楽ではないことがうかがえる。しかし、標準偏差は1.06とばらつきがあり、尖度や歪度の値からみて、

大きな分布の偏りはないといえる。

全尺度項目の総得点の上位群25%、下位群25%を抽出し、項目毎にGP分析を行ったところ、全ての項目で上位群が下位群よりも有意に高い得点を示していた。また、各項目と総得点の相関係数、各項目を除いた場合の α 係数の値からみても、尺度の信頼性は十分と判断した。尺度の総得点の度数分布はFigure 1に示したように、左右対称の単峰型で、左右に裾を引く正規分布の形状で、偏りや歪みがないことを示していた。

Figure 1 尺度の総得点の度数分布



学年による違い (A 大学学生の回答に基づく分析)

3年生と4年生双方の回答を回収したのはA大学のみであったため、学年間の違いはA大学学生の回答を対象に分析を行った。

Table 3に示したように、23項目中15項目において4年生の方が3年生よりも数値が高くなっていた。しかし、そのうち統計的に有意な違いを示

したのは、「19. 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う」($t=2.40, p<.05$)と「23. 時間はかかっても、就職活動に一生懸命取り組めばよりよい就職ができると思う」($t=2.18, p<.05$)のみであった。逆に、統計的に有意ではないものの、4年生の方が3年生よりも低い数値を示したものが、6項目あった。就職活動に対する自己効力感は、年次が上がることによって多少の上昇はみせるものの、卒業に近づき就職活動経験をすることによって、急激に上がるわけではないことが推測される。4年生の中には、就職活動に手ごたえを感じて熟達を経験した者も、うまく行かず敗北感を経験した者も含まれるであろう。活動経験が双方向に影響したために、平均値を算出した時に明確な違いがあらわれなくなった可能性もある。とはいえ、4年生の標準偏差の方が3年生よりも大きいというわけではないため、断定は難しい。また、同一対象者を追跡調査したものではないため、対象者の特性の違いや新卒雇用環境の変化が含まれてしまい、見かけ上の変化が少なくあらわれた可能性もある。

性 差

性差については、3年生の回答（男子300名、女子137名）を対象に分析した（Table 4）。有意な差がみられた項目のうち、女子の方が男子よりも高かったのは、「4. 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う」($t=2.55, p<.05$)、「6. 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う」($t=4.28, p<.001$)、「10. 筆記試験のための事前勉強ができると思う」($t=2.55, p<.05$)、「11. できるだけ多くの企業説明会（セミナー）に参加することができると思う」($t=3.59, p<.001$)の4項目である。

逆に、有意に男子の方が女子より高かった項目は、「17. 自分の興味を把握することができると思う」($t=2.10, p<.05$)、「18. 自己の持ち味・

能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う」($t=2.33$, $p<.05$)の2項目であった。

Table 3 学年差 (A 大学学生の回答)

	3年生 n=153	4年生 n=110
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.05 (0.96)	4.02 *** (0.90)
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	3.75 (0.94)	3.76 *** (0.80)
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.29 (1.12)	3.53 *** (0.89)
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.41 (0.97)	3.61 ** (0.85)
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.23 (1.16)	3.30 ** (0.98)
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	2.98 (1.08)	3.16 * (0.89)
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	3.27 (1.14)	3.35 ** (0.95)
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	2.92 (1.27)	3.04 ** (1.10)
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.24 (1.22)	3.39 (1.05)
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.24 (1.14)	3.30 ** (1.00)
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	3.12 (1.01)	3.47 *** (0.86)
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	2.90 (1.04)	3.13 (0.94)
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.51 (1.11)	2.77 ** (0.92)
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.48 (0.97)	3.82 (0.86)
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.16 (1.07)	3.51 *** (0.81)
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.31 (1.06)	3.53 ** (0.79)
17 自分の興味を把握することができると思う	3.61 (1.05)	3.89 ** (0.84)
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.17 (1.05)	3.51 ** (0.87)
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.12 (1.02)	3.45 * (0.90)
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.20 (1.05)	3.63 ** (0.83)
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.75 (1.02)	3.98 ** (0.74)
22 就職活動に必要な知識やテクニクが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.79 (0.96)	4.10 (0.76)
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組みばよりよい就職ができると思う	3.47 (1.10)	3.95 * (0.95)

* $p<.05$

()内は標準偏差

これらの結果をみると、自己分析に対する効力感は男子が女子より高い

が、就職活動に積極的に取り組むことに対する効力感は女子の方が男子より高いといえる。

Table 4 性差 (3年生の回答)

	男 n=300	女 n=137
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.20 (0.87)	4.34 (0.79)
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	3.92 (0.90)	3.84 (0.81)
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.44 (1.08)	3.52 (1.02)
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.56 (0.97)	3.79 * (0.83)
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.12 (1.13)	3.18 ** (1.01)
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	2.94 (0.99)	3.36 *** (0.87)
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたリ練習するなど十分な準備ができると思う	3.36 (1.07)	3.53 (0.92)
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	3.10 (1.25)	3.18 (1.07)
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.15 (1.19)	3.31 (1.17)
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.37 (1.11)	3.62 * (0.88)
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	3.31 (1.01)	3.64 *** (0.86)
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	2.96 (1.08)	3.12 (0.93)
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.514 (1.05)	2.49 (0.99)
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.57 (0.96)	3.57 (0.95)
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.36 (1.03)	3.18 (0.89)
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.40 (1.06)	3.33 (0.88)
17 自分の興味を把握することができると思う	3.76 (1.04)	3.54 * (0.93)
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.36 (1.05)	3.14 * (0.88)
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.27 (1.02)	3.19 (0.82)
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.38 (1.02)	3.22 (0.91)
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.97 (0.99)	3.94 (0.82)
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.95 (0.97)	3.92 (0.87)
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	3.60 (1.10)	3.77 (0.92)

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

() 内は標準偏差

Table 5 進路希望による差（3年生の回答）

	就職 n=342	進学 n=17	未決定 n=137	多重比較
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.27 (0.82)	4.12 (0.93)	4.09 (1.00)	
2 就職活動がうまくいかなない時があっても、その後活動を続けることができると思う	4.00 (0.83)	3.88 (0.70)	3.41 (0.94)	*** 未決定<就職
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.61 (1.02)	2.88 (1.11)	3.00 (1.05)	*** 進学<未決定<就職
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.71 (0.91)	3.59 (0.94)	3.25 (0.98)	** 未決定<就職
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.20 (1.10)	2.82 (0.95)	2.92 (1.04)	
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	3.10 (0.96)	3.29 (0.99)	2.93 (1.04)	
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	3.46 (1.02)	3.41 (1.00)	3.17 (1.09)	
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	3.09 (1.20)	3.82 (1.24)	3.12 (1.18)	* 就職<進学
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.14 (1.19)	3.88 (1.22)	3.28 (1.14)	* 就職<進学
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.48 (1.05)	3.29 (1.10)	3.29 (1.03)	
11 できるだけ多くの企業説明会（セミナー）に参加することができると思う	3.51 (0.95)	3.12 (1.11)	3.03 (0.97)	*** 未決定<就職
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	3.06 (1.04)	2.65 (0.86)	2.84 (1.02)	
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.51 (1.03)	2.53 (1.12)	2.54 (1.06)	
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.61 (0.96)	3.47 (0.80)	3.39 (0.99)	
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.32 (1.01)	3.65 (0.93)	3.13 (0.94)	
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.38 (1.00)	3.88 (1.05)	3.20 (1.01)	* 未決定<進学
17 自分の興味を把握することができると思う	3.70 (1.01)	3.94 (0.83)	3.61 (1.03)	
18 自己の持ち味・能力をいかにせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.29 (0.99)	3.65 (1.06)	3.16 (1.08)	
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.24 (0.96)	3.47 (0.94)	3.16 (0.98)	
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.34 (0.98)	3.76 (0.66)	3.16 (1.08)	
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.99 (0.92)	4.47 (0.62)	3.69 (1.03)	** 未決定・就職<進学
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.99 (0.93)	3.94 (0.90)	3.68 (0.98)	* 未決定<就職
23 時間がかかっても、就職活動に一生懸命に取り組みればよりよい就職ができると思う	3.71 (1.03)	4.06 (0.97)	3.21 (1.11)	*** 未決定<就職・進学

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

() 内は標準偏差

進路希望による差

進路希望による差についても、3年生の回答（就職希望342名，進学希望17名，未決定76名）を対象に分析した（Table 5）。分散分析の結果、

有意な差が見出されたのは、「2. 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う」($F(2, 431) = 15.34, p < .001$), 「4. 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う」($F(2, 431) = 7.65, p < .01$), 「11. できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う」($F(2, 432) = 8.73, p < .001$), 「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっているならば、よりよい就職ができると思う」($F(2, 432) = 3.28, p < .05$), 「23. 時間はかかっても、就職活動に一生懸命取り組めばよりよい就職ができると思う」($F(2, 431) = 8.56, p < .001$)である。

これらについて、Bonferroniの多重比較を行ったところ、未決定者と就職希望者との間に有意差があり、未決定者の方が就職希望者よりも数値が低いことが確認された。就職活動に取り組む自信がないことや、活動してもよい仕事に就けると思えないことが、進路決定を妨げていると解釈できる。労働政策研究・研修機構(2006)が大学就職部を対象に行った調査では、進路未決定学生の特徴として、「自信がない」(68%)が「何をしたらいいかわからない」(78%), 「就職活動をスタートするのが遅い」(76%)に次いで多く上げられていた。効力感が低いことが、就職活動への意欲を低め、就職に進みづらくさせていることが示唆される。

「3. 就職活動を他の何よりも優先することができると思う」($F(2, 431) = 13.82, p < .001$)も、未決定者の方が就職希望者より値が低かったが、進学希望者は未決定者よりも値が低かった。しかし、進学希望者の値が高い項目もあり、「8. 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う」($F(2, 432) = 3.03, p < .05$), 「9. 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う」($F(2, 432) = 3.40, p < .05$)については、進学希望者の方が就職希望者よりも値が高かった。「16. 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う」($F(2, 432) = 3.34, p < .05$), 「23. 時間はかかっても、就職活動に一生懸命取り組めばよりよ

い就職ができると思う」($F(2, 431) = 8.56, p < .001$)については、進学希望者の方が未決定者よりも値が高く、「21. 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う」($F(2, 430) = 5.83, p < .01$)については、進学希望者の方が就職希望者、未決定者双方よりも数値が高かった。これらのことから、進学希望者は就職活動を何より優先するという点でのみ効力感は低いが、情報収集や自己分析に対する効力感が高いといえる。自己分析へのこだわりが、進学という選択を導いているのかもしれない。

大学間の差

大学間の差についても、3年生の回答（A大学153名、B大学92名、C大学129名、D大学21名、E大学16名、F大学31名）を対象に分析した。分散分析の結果、Table 6にみられるように、ほとんどの項目において大学間の差が検出された。差が見出されなかったのは、「9. 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う」、「12. 好印象をあたえるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う」、「14. 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う」、「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっていたら、よりよい就職ができると思う」の4項目のみである。

Bonferroniの多重比較で有意な差が検出されたものをTable 7によって示した。大学間の交差する箇所に示された数字は、尺度の項目番号である。最も他大学との間に差があらわれたのはA大学で、特にC大学とF大学との間に有意差のある項目が多くあらわれた。いずれの項目においても、A大学はC大学よりもF大学よりも値が低いという結果であった。

Table 6 大学間の差 (3年生の回答)

	A 大学 n=153	B 大学 n=92	C 大学 n=129	D 大学 n=21	E 大学 n=16	F 大学 n=31
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.05 (0.96)	4.02 (0.90)	4.42 (0.68)	4.21 (0.60)	4.19 (0.83)	4.68 (0.70) ***
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	3.75 (0.94)	3.76 (0.80)	4.06 (0.86)	3.71 (0.78)	4.06 (0.44)	4.40 (0.67) ***
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.29 (1.12)	3.53 (0.89)	3.74 (1.00)	3.33 (0.97)	3.94 (0.77)	2.97 (1.25) ***
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.41 (0.97)	3.61 (0.85)	3.78 (0.98)	4.00 (0.71)	3.75 (0.77)	3.74 (0.89) **
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.23 (1.16)	3.30 (0.98)	3.15 (1.05)	2.76 (1.26)	2.70 (0.63)	2.68 (1.08) **
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	2.98 (1.08)	3.16 (0.89)	3.16 (0.92)	3.29 (0.96)	3.56 (0.63)	2.65 (0.95) *
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	3.27 (1.14)	3.35 (0.95)	3.64 (0.93)	2.95 (1.07)	3.81 (0.83)	3.47 (0.90) **
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	2.92 (1.27)	3.04 (1.10)	3.30 (1.15)	3.24 (1.34)	2.88 (0.89)	3.77 (1.02) **
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.24 (1.22)	3.39 (1.05)	3.12 (1.12)	3.19 (1.40)	2.63 (0.81)	3.13 (1.48)
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.24 (1.14)	3.30 (1.00)	3.74 (0.89)	3.62 (0.97)	3.69 (0.70)	3.29 (1.32) **
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	3.12 (1.01)	3.47 (0.86)	3.65 (0.92)	3.67 (0.86)	3.94 (0.77)	3.26 (1.06) ***
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	2.90 (1.04)	3.13 (0.94)	3.11 (1.09)	2.62 (1.16)	2.88 (0.72)	3.29 (1.04)
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.51 (1.11)	2.77 (0.92)	2.54 (1.03)	2.05 (0.97)	1.94 (0.57)	2.45 (1.06) **
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.48 (0.97)	3.82 (0.86)	3.58 (0.95)	3.29 (1.01)	3.38 (1.09)	3.52 (1.09)
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.16 (1.07)	3.51 (0.81)	3.34 (1.01)	2.76 (0.89)	2.75 (0.77)	3.84 (0.82) ***
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.31 (1.06)	3.53 (0.79)	3.33 (1.03)	3.10 (1.14)	2.81 (0.66)	3.84 (1.04) **
17 自分の興味を把握することができると思う	3.61 (1.05)	3.89 (0.84)	3.64 (1.03)	3.19 (1.33)	3.44 (0.73)	4.19 (0.79) **
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.17 (1.05)	3.51 (0.87)	3.30 (0.98)	2.81 (0.87)	3.00 (0.37)	3.58 (1.36) **
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.12 (1.02)	3.45 (0.90)	3.24 (0.91)	2.90 (0.94)	3.06 (0.44)	3.58 (1.09) *
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.20 (1.05)	3.63 (0.83)	3.29 (0.95)	2.90 (1.09)	3.13 (0.50)	3.68 (1.14) **
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.75 (1.02)	3.98 (0.74)	4.09 (0.93)	3.71 (0.90)	4.19 (0.66)	4.39 (0.95) **
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.79 (0.96)	4.10 (0.76)	3.93 (0.99)	3.76 (0.89)	4.25 (0.86)	4.10 (1.04)
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	3.47 (1.10)	3.95 (0.95)	3.65 (1.09)	3.52 (0.93)	3.94 (0.57)	3.52 (1.06) *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

() 内は標準偏差

Table 7 大学間の差 (多重比較結果)

	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学
A大学					
B大学	20,23				
C大学	1,2,3,4,7,10,11,21	1,10			
D大学	1	1,15,20			
E大学	11	13			
F大学	1,2,8,15,17,21	1,2,8	3	15,17	3,6,15,16

就職活動水準との関係

A大学においては、4年生を対象として就職活動経験について卒業時に調査した。この2回目の調査は、2007年3月下旬の卒業式当日に行われた。卒業時の調査回答と4年次開始時に回収した就職活動に対する自己効力感の回答との関係を見ることにより、尺度の予測妥当性を検討した。

活動開始時期との関係 就職活動に対する自己効力感の各測定項目と、就職活動に関わる各行動の開始時期との相関係数をTable 8に示した。これにより、就職活動に対する自己効力感の高い者ほど、就職活動に対して早くから取り組んだかどうかを確認する。開始時期の数值は、2007年3月に行われた第2回目調査時点から遡って何ヶ月前に開始されたかによってあらわされている。従って、この値が正であると、就職活動に対する自己効力感が高い者ほど、早く就職活動を始めたと考えことができ、負の値であると、就職活動に対する自己効力感が高い者ほど、就職活動を始めたのが遅いと考えることができる。

「1. 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う」と面接試験開始時期との間には、.28の正の相関関係がみられ、様々な情報源を利用できるという効力感の高い者ほど、面接試験にのぞんだ時期が早いことが分かる。「3. 就職活動を他の何よりも優先することができると思う」は説明会参加開始時期およびエントリー開始時期と正の相関がみられた。就職活動に対する優先

づけの高い者は、企業への最初の接触である説明会参加、エントリーといった活動に早く着手しているのが分かる。「4. 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う」は、エントリー開始時期と面接試験開始時期と正の相関傾向 ($r=.21, p<.10$) がみられたため、多くの企業に接触できるという効力感の高い者は、量だけでなく取り組み時期も早いことになる。「11. できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う」も、エントリー開始時期と正の相関傾向にあり、同様にとらえられる。しかし、その他の項目については、5%水準では有意な関係がみられなかったため、就職活動に対する自己効力感の高い者が、明確に就職活動に早くから取り組めるわけではないと考えられた。「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっているならば、よりよい就職ができると思う」とナビへの登録時期は負の関係にあり、テクニックがあればよい就職ができると考える者は、活動開始時期が遅かったことを意味する。自信があるがゆえに早くから取り組まなかったと解釈することもできよう。

上述の結果を概観すると、就職活動に対する自己効力感を構成する各尺度と就職活動の開始時期との関係は、それほど強くない。大学の就職部では、就職が決まらない学生は就職活動をスタートするのが遅いととらえており(労働政策研究・研修機構, 2006)、このことは、就職活動を早くスタートさせることが、就職を決める上で重要であることを示唆する。だとすれば、就職活動に対する自己効力感尺度は、予測妥当性に欠ける可能性が考えられる。しかし、今回対象としたのは、A大学の学生のみであるため、A大学特有の傾向があらわれた可能性もある。

Table 8 活動開始時期との相関関係 (A 大学4年生の回答)

	活動開始時期			
	ナビ登録	説明会参加	エントリー	面接試験
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	.15	.04	.23	.28
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	-.06	-.08	-.01	-.01
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	.11	.29*	.29*	.20
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	.13	.15	.21	.23
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	-.04	.00	.07	.05
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	-.15	-.04	.09	.01
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	.10	.02	.01	.00
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	-.04	-.16	-.08	-.12
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	-.10	-.12	-.12	-.16
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	-.01	-.13	-.20	-.10
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	.11	.18	.21	.19
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	.15	.15	.18	.19
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	-.05	.02	-.03	.06
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	-.14	-.04	.01	.07
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	.04	.03	.02	.13
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	-.10	-.01	-.04	.00
17 自分の興味を把握することができると思う	-.05	.03	.00	.02
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	-.04	-.04	-.01	.03
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	-.01	-.02	.03	.06
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	0.3	.12	.05	.19
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	-.09	-.17	-.16	-.09
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	-.24*	-.16	-.11	-.07
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	-.18	-.16	-.15	-.08

* $p < .05$

接触企業数との関係 就職活動に対する自己効力感の各測定項目と、就職活動中に接触した企業数との相関係数をTable 9に示した。これにより、就職活動に対する自己効力感の高い者ほど、多くの企業に挑戦したか

どうかを確認する。明確な正の相関がみられたのは、「11. できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う」、「4. 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う」、「6. 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う」、「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっているならば、よりよい就職ができると思う」で、説明会、履歴書提出、筆記試験と明確な正の相関関係がみられた。「16. 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う」、「17. 自分の興味を把握することができると思う」も企業数を測定するいくつかの項目に有意な正の関係があった。その他、5%水準では有意な関係にないが、「3. 就職活動を他の何よりも優先することができると思う」($r=.20, p<.10$)、「16. 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う」($r=.23, p<.10$)など、正の相関傾向もいくつかみられるため、就職活動に対する自己効力感と、接触企業数によってあらわされる就職活動水準との間には、概ね正の関係があると判断される。内定数についてはほとんど関係がみられなかったが、内定数を多く得ることが就職活動の目的ではないため、就職活動に対する自己効力感の予測妥当性は、接触企業数についてはある程度得られたといえよう。

就職活動に対する努力と満足との関係 就職活動に対する自己効力感の各測定項目と、就職活動に対する努力と満足との相関係数をTable 10に示した。これにより、就職活動に対する自己効力感の高い者ほど、就職活動に対する努力量が多く、満足感が高いかどうかを確認する。

全体をみわたすと、有意な正の相関関係あるいは10%水準での相関傾向がみられた項目が多い。全く関係がみられないといえるのは「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっているならば、よりよい就職ができると思う」だけで、統計的に有意な関係でなくても、ある程度正の関係にあることがうかがえる。

Table 9 接触した企業数との相関関係 (A 大学4年生の回答)

	企業数				
	説明会	履歴書提出	筆記試験	面接試験	内定
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	.07	.02	.13	-.02	-.08
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	.14	.12	.12	.15	.08
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	.15	.10	.20	.04	-.09
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	.37**	.34**	.31**	.27*	-.04
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	.20	.08	.12	.03	.15
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	.36**	.32**	.34**	.35**	.03
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	.20	.11	.18	.14	-.10
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	-.10	-.22	-.14	-.21	.00
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	.02	-.05	.03	-.03	.21
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	-.03	-.14	-.03	-.09	.06
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	.43***	.43***	.45***	.36**	.20
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	.10	.04	.04	.00	.01
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	-.03	-.07	-.05	-.04	.10
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	.06	.01	.07	.09	.05
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	.12	-.01	-.06	.00	-.01
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	.24*	.16	.10	.23	.12
17 自分の興味を把握することができると思う	.28*	.25*	.18	.27*	-.02
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	.09	-.02	.00	.01	.03
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	.14	.03	.09	.07	.12
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	.18	.06	.10	.10	.18
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	.05	-.01	.09	.03	-.03
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	.29*	.33**	.34**	.33**	.01
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	-.03	-.02	-.01	.05	.10

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

努力との間の相関が特に高いのは、「20. 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う」、「11. できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う」、「4. 志望する企業にできるだ

け多くエントリーすることができると思う」で、興味に合う就職先を決めたり、多くの企業に挑戦できるという効力感の高い学生は、努力量が多かったと評価していることになる。

Table 10 就職活動に対する努力と満足感との相関関係 (A 大学 4 年生の回答)

	努力 満足	
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	.00	.13
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	.21	.23
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	.25 *	.13 *
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	.34 **	.21
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	.14	.13
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	.29 *	.29 *
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	.19	.17
8 先輩や OB・OG から必要な情報を得ることができると思う	.00	.20
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	.06	.35 **
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	.19	.21
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	.37 **	.25 *
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	.23	.21
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	.23 *	.24 *
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	.11	.22
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	.21	.33 **
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	.13	.18
17 自分の興味を把握することができると思う	.30 **	.16
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	.28 *	.21
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	.24 *	.28 *
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	.40 ***	.28 *
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	.07	.13
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	.01	-.04
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	.17	.20

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

満足感との相関が比較的高かったのが、「9. 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う」、「15. 自己の持ち味・能力を把握することができると思う」で、身近な人から情報を得たり、自己分析ができる効力感の高い学生が満足はいく就職活動を行えたと考えられる。

このように、努力と満足については、ほとんどの項目との間に正の相関傾向がみられたため、就職活動に対する自己効力感の高い者は、就職活動に対して高い努力を投じ、満足はいく就職ができるという予測妥当性が確認されたと判断した。

就職の有無との関係

就職した者と就職しなかった者の、就職活動に対する自己効力感の違いは、Table 11に示した。正社員として就職した者と、契約・派遣社員として就職した者のうち、双方の調査に参加した64名を「就職者」とした。それ以外の者から家業を継いだ者と進学者を除いた者のうち、双方の調査に参加した16名を非就職者とした。そして、就職者と非就職者の回答の平均値を算出するとともに、*t*検定によって差の有無を確認した。

結果を概観すると、概ね就職者の方が非就職者より得点が高かったが、統計的に有意な差がみられたのは、「15. 自己の持ち味・能力を把握することができると思う」($t=2.11$, $p<.05$) だけであった。しかし、有意差がみられなかったのはサンプル数が少ないことが原因とも考えられる。

また、統計的に有意ではないものの、中には非就職者の方が就職者よりも数値が高い項目もみられた。「16. 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う」、「18. 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う」、「21. 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う」「22. 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっているならば、よりよい就職ができると思う」「23. 時間はかかっても、就職活動に一生懸命取り組めばよりよい就職ができると思う」5項

目である。自分の望むライフスタイルを把握し、能力をいかす就職をするという効力感の高い者や、自己の興味・能力を理解することがよい就職につながると強く考える者の方が、就職という道に進んでいないことになる。自分らしさへのこだわりがキャリアの幅を狭めるという指摘や(高橋, 2004), やりたいことへのこだわりがフリーター選択を導くという指摘(小杉, 2003)があるが、そうした自己分析への執着は一般的な就職以外の道に導く原因になるのかもしれない。しかし、就職活動をすればよい就職ができるという効力感が高い者が就職という道を選択しなかった点は、自己効力感の理論的解釈とは異なる。

上記から、就職活動に対する効力感の高低が直接的に就職の有無を予測するとは考えにくい。就職できるかできないかを決定するのは、本人の努力以外の外的要因もかかわってくるからであろう。また、特定の活動だけが内定取得に関係するわけではなく、様々な活動を組み合わせて内定は取得可能となる。従って、就職の有無に対する予測妥当性については、就職活動に対する自己効力感の背後に存在する潜在因子との関係を確認することが特に重要と考えられる。また、対象者の人数を増やすことによって、安定した結果を算出することも必要である。

結 論

就職活動に対する自己効力感尺度を構成する個々の質問項目に対する大学生の回答は、大きな分布の偏りはみられなかった。対象者を、性別、学年、進路希望や所属大学といったサブグループに分割して項目ごとの回答の平均値を比較したところ、ほとんどの項目において何らかのグループ間の差が見出された。これらの結果は、就職活動に対する自己効力感尺度の弁別性を示すものと判断した。信頼性も十分であった。

就職活動に対する自己効力感の各項目と、就職活動開始時期との間には

明確な関係はみられなかった。しかし、接触企業数や、就職活動に対する満足感および努力の程度と正の関係がみられたことから、ある程度の予測妥当性も備えていると考えられた。ただし、予測妥当性の分析は、A大学の4年生のみを対象としたため、人数が少なく、A大学特定の特徴がみられた可能性もある。対象者を拡張して再度確認する必要がある。

これらのことより、太田・岡村（2006）を改定した尺度は、大学生の就職活動に対する自己効力感をとらえることができ、大学生の就職活動を支援するツールとして役立つと判断した。

引用文献

- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*, NJ: Prentice Hall College Div.
バンデュラ, A. 本明寛・野口京子（監訳）（1997）. 激動社会の中の自己効力 金子書房
- 小杉礼子（2003）. フリーターという生き方 勁草書房
- 松田惺（1999）. 自己効力感. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典CD-ROM版 有斐閣
- 内閣府（2003）. 平成15年版国民生活白書：デフレと生活—若年フリーターの現在 ぎょうせい
- 太田さつき・岡村一成（2006）. 就職活動に対する自己効力感：測定尺度作成の試み. 応用心理学研究 31, 65-75.
- 労働政策研究・研修機構（2006）. 大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果Ⅱ—「大学就職部／キャリアセンター調査」及び「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」 労働政策研究・研修機構
- 高橋俊介（2004）. スローキャリア PHP研究所
- 財務省財務総合政策研究所（2006）. 「多様な就業形態に対する支援のあり方研究会」における議論の概要について 報道発表資料

Table 11 就職者と非就職者の差 (A 大学4年生の回答)

	就 職 n=64	非就職 n=16
1 就職活動に必要な情報を得るために、新聞・雑誌や本、インターネットなどを利用することができると思う	4.25 (0.78)	4.13 (1.02)
2 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	3.92 (1.03)	3.75 (1.06)
3 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	3.20 (1.01)	3.00 (1.15)
4 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができると思う	3.56 (1.08)	3.13 (1.20)
5 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	3.06 (1.14)	2.88 (1.15)
6 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	3.02 (1.08)	2.69 (1.20)
7 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	3.11 (1.18)	2.75 (1.44)
8 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	2.69 (1.32)	2.50 (1.37)
9 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	3.47 (1.08)	2.93 (1.39)
10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	3.03 (1.18)	2.80 (1.15)
11 できるだけ多くの企業説明会(セミナー)に参加することができると思う	3.34 (1.09)	2.94 (1.29)
12 好印象を与えるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	3.03 (1.17)	2.69 (1.20)
13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	2.55 (1.22)	2.31 (1.20)
14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	3.50 (0.87)	3.44 (1.09)
15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	3.37 (1.00)	2.75 (1.18)
16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	3.47 (1.05)	3.56 (0.81)
17 自分の興味を把握することができると思う	3.77 (0.92)	3.63 (1.20)
18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	3.39 (0.99)	3.44 (1.36)
19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	3.42 (1.00)	3.06 (1.29)
20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	3.33 (0.98)	3.31 (1.58)
21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	3.80 (1.01)	4.27 (0.96)
22 就職活動に必要な知識やテクニックが分っていれば、よりよい就職ができると思う	3.83 (0.94)	4.00 (1.21)
23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命に取り組めばよりよい就職ができると思う	3.72 (1.16)	3.81 (1.42)

*p<.05

() 内は標準偏差

ITによるゼミ教育の支援に関する研究

広瀬 盛一／円城寺敬浩／太田さつき
田畑 智章／土井 充／武藤 篤生／安田 賢憲

I はじめに

本研究の目的は、東京富士大学経営学部で行っている専門演習（研究ゼミ）教育の充実を目的として、これまで実験的に導入されてきた「グループウェア」の持つ教育効果や課題を明らかにすることである。

グループウェア（Groupware）とは、コラボレーティブ・ソフトウェア（Collaborative Software）とも呼ばれ、企業や組織内のLAN（Local Area Network）を活用した情報共有のためのシステムである。ネットワークに接続されたコンピュータ（のユーザー）どうしによる情報の交換や共有を通じて、業務の効率化を目指したもので、メール、掲示板、チャット、データサーバーといった多様な機能が一つのシステムに統合されている。

筆者らは、2004年4月よりオープン・テキスト社（Open Text Co.）のグループウェア、First Class（以下FCと略す）を導入し、研究ゼミ教育における活用を試みてきた。

昨年までの研究では、教育現場におけるグループウェアの導入に関して検討し、グループウェアに要求される機能や仕様を明らかにし、実際にグループウェア・システムを導入し運用することによって、その有効性を検証^[1]することができた。

その結果、ゼミ内における「学生間」および「学生と教員間」の時間と場所のギャップをこえてコミュニケーションを活発に行うインフラを提供

するという目的の一部は達成されたが、参加学生数が少なかったり、教員や学生が不慣れであるといった課題が明らかになった。そこで、本研究では、これまでの運用において課題とされてきた利用者の活動状況をログから分析し、研究ゼミ教育におけるグループウェアの導入に関して、より有効な活用方法を定量的なデータ分析の結果から明らかにする。

II 高等教育における IT 活用の現状

日本の高等教育の現場では1980年代に、情報教育、すなわちコンピュータ・リテラシー教育ためにITが導入された。その後、ITの音声や映像を組み合わせたマルチメディアによる豊富な表現機能や、学生一人一人に対しインタラクティブなコンテンツを提供することができる利点が注目され、情報教育以外の科目についてもITが導入されe-Learningシステムとして導入がさらに広がった。最近では、学生の能力に応じて、One-to-Oneのコンテンツを提供しリメディアル（補習教育）教育を実現する例、ネットワーク接続し自宅からアクセスしたりモバイルの携帯端末を利用しユビキタスな教育環境を実現する例なども多く報告されている。以下では高等教育におけるIT活用の現状を述べる。

1 IT を活用した教育の導入状況

独立行政法人メディア教育開発センターによれば、大学等の高等教育機関でe-Learning（eラーニング）等のITを活用した教育（以下「ITを活用した教育」と略す）を導入している割合は44.3%である。また、機関別の導入率は、大学が50.9%、短期大学が27.9%、高等専門学校が60.9%となっており、大学、高等専門学校では半数以上が導入していることになる。

大学の設置形態別では、国立が76.0%、公立大学が27.0%、私立大学では48.0%の導入率だった。国立大学と比べて、私立大学におけるITを活

用した教育の導入が遅れていることがわかる。また、学部数の別で見ると、5学部以上の規模の大きい大学では81.0%と非常に高い導入率となっており、単科大学では38.4%と導入率が低くなっている。

	大 学				短 大	高 専	未記入	合 計
	全 体	設置形態						
		国 立	公 立	私 立				
導入している	234 (50.9%)	57 (76.0%)	10 (27.0%)	167 (48.0%)	67 (27.9%)	28 (60.9%)	15 (48.4%)	344 (44.3%)
導入していない	226 (49.1%)	18 (24.0%)	27 (73.0%)	181 (52.0%)	173 (72.1%)	18 (39.1%)	16 (51.6%)	433 (55.7%)

図表1 ITを活用した教育の導入状況(設置形態(国公私等)別)
(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.htmlより転載)

	大 学				短 大	高 専	未記入	合 計
	全 体	学部数						
		5 学部以上	2～4 学部	単科大学				
導入している	234 (50.9%)	68 (81.0%)	93 (50.0%)	73 (38.4%)	67 (27.9%)	28 (60.9%)	15 (48.4%)	344 (44.3%)
導入していない	226 (49.1%)	16 (19.0%)	93 (50.0%)	117 (61.6%)	173 (72.1%)	18 (39.1%)	16 (51.6%)	433 (55.7%)

図表2 ITを活用した教育の導入状況(学部数等別)
(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.htmlより転載)

現在、ITを活用した教育を導入していない機関に今後の予定を聞いたところ、「導入を検討している」が35.8%、「導入を予定している」が14.8%であり、ITを活用した教育を導入していない大学等のうち約半数(50.6%)が、今後の導入を予定または検討していることがわかる。

項 目	回答数	割 合
導入を検討している	155	35.8%
導入を予定している	64	14.8%
導入の検討もなく、予定もしていない	211	48.7%
無回答	3	0.7%
総合計	433	100.0%

図表3 ITを活用した教育の検討状況
(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.htmlより転載)

ITを活用した教育の対象としては、「学部教育」が39.8%、「大学院」が10.3%、「リメディアル」が8.2%、「生涯学習」が3.3%となっている。また、ITを活用した教育を導入している機関のみを対象とすると、「学部教育」が89.8%、「大学院教育」が23.3%、「リメディアル教育」が18.6%、「生涯学習」が7.6%であり、学部教育における教育が重視されていることがわかる。

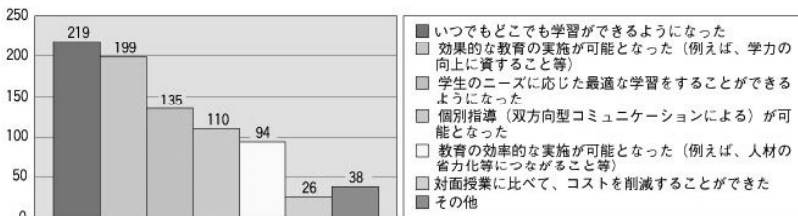
このような取組に対して各大学はどのように取り組んでいるのだろうか。同調査によれば、ITを活用した教育を実施している機関のうち、「学内の一部の組織（センター、学科・学部等）で取り組んでいる」が57.6%、「学内で全体的に取り組んでいる」が32.3%となっていた。なお、「学内の一部の組織（センター、学科・学部等）で取り組んでいる」の中には、学内の複数の組織により取り組んでいるケースも含まれる。一方、「教職員が個人的に取り組んでいる」が24.4%となっている。全体としては組織的な取組が多いが、個人に頼った取組も決して少なくない。

ITを活用した教育が、どのような学問領域で活用されているかを見てみると、「情報学」が24.6%、「外国語教育等（言語学）」が18.7%、「経営学」が8.2%、「経済学」が7.1%、「教育学」が6.9%、「電気電子工学」が6.8%となっている。本学でも経営学の導入教育におけるe-Learningコンテンツとして、ビジネスゲームを活用した実績がある^[2]。

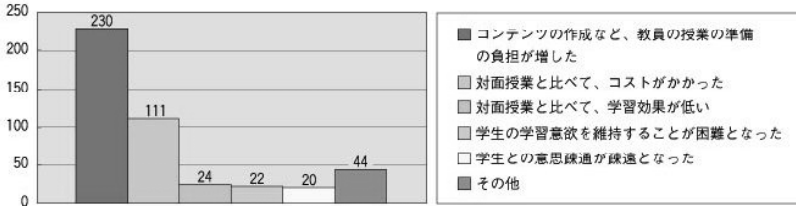
ITを活用した教育を導入したことのメリットについては、「いつでもどこでも学習が可能」が63.7%、「効果的な教育の実施が可能」が57.8%、「学生のニーズに応じた最適な学習が可能」が39.2%、「双方向型コミュニケーションが可能」が32.0%となっている。一方、デメリットは、「コンテンツの作成など、教員の授業の準備の負担が増した」が66.9%、「対面授業と比べて、コストがかかった」が32.3%であり、その反面、回答率が低かったのは、「対面授業と比べて、学習効果が低い」が7.0%、「学生の学習意欲の維持が困難となった」が6.4%であった。

項目	ITを活用した教育を導入している分野		e-Learningを導入している分野		項目	ITを活用した教育を導入している分野		e-Learningを導入している分野	
	回答数	割合	回答数	割合		回答数	割合	回答数	割合
情報学	191	24.6%	146	18.8%	看護学	22	2.8%	10	1.3%
外国語教育等(言語学)	145	18.7%	114	14.7%	土木工学	21	2.7%	13	1.7%
経営学	64	8.2%	48	6.2%	薬学	19	2.4%	10	1.3%
経済学	55	7.1%	36	4.6%	建築学	18	2.3%	13	1.7%
教育学	54	6.9%	29	3.7%	材料工学	18	2.3%	8	1.0%
電気・電子工学	53	6.8%	34	4.4%	農学	18	2.3%	8	1.0%
数学	47	6.0%	29	3.7%	哲学	17	2.2%	8	1.0%
科学教育・教育工学	46	5.9%	31	4.0%	歯学	16	2.1%	8	1.0%
社会学	40	5.1%	25	3.2%	地球惑星科学	10	1.3%	4	0.5%
心理学	38	4.9%	24	3.1%	畜産学・獣医学	9	1.2%	6	0.8%
物理学	37	4.8%	24	3.1%	ゲノム科学	9	1.2%	4	0.5%
生物学	37	4.8%	24	3.1%	人類学	8	1.0%	4	0.5%
文学	36	4.6%	19	2.4%	水産学	8	1.0%	5	0.6%
医学	36	4.6%	28	3.6%	天文学	7	0.9%	3	0.4%
化学	35	4.5%	20	2.6%	林学	7	0.9%	4	0.5%
機械工学	34	4.4%	18	2.3%	プロセス科学	6	0.8%	1	0.1%
法学	28	3.6%	19	2.4%	ナノ・マイクロ科学	5	0.6%	2	0.3%
環境学	25	3.2%	18	2.3%	プラズマ科学	4	0.5%	3	0.4%
政治学	23	3.0%	12	1.5%	その他	72	9.3%	55	7.1%
史学	22	2.8%	12	1.5%	総合計	1,340		879	

図表4 ITを活用した教育を導入している分野・e-Learningを導入している分野(複数回答可:回答者全体における割合)
(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.htmlより転載)



図表5 ITを活用した教育のメリット
(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.htmlより転載)



図表6 ITを活用した教育のデメリット

(http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/3_1.html より転載)

ここで報告されているシステム導入のメリット、デメリットについては、田畑、広瀬、武藤、安田（2006）の成果においてもほぼ同様の問題が指摘されている。

2 現代的教育ニーズ取組支援プログラムにおける取組

文部科学省の国公私立大学を通じた大学教育改革の支援においても、平成16年度から「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」の一環として、「ITを活用した実践的遠隔教育（e-Learning）」がテーマに挙げられている。

このテーマは、平成17年度から、「ニーズに基づく人材育成を目指したe-Learning Programの開発」となり、平成19年度からは「教育効果向上のためのICT活用教育の推進」となった。つまり、単なるインフラとしてインターネット技術を活用するのではなく、教育プログラムとしての創意工夫を選ぶものとなっている。

平成16年度におけるe-Learningへの応募は108件で採択数は15件（採択率13.9%）、平成17年度は応募が86件で採択数は14件（採択率16.3%）、平成18年度は応募は71件で採択率は13件（採択率18.3%）だった（図表1参照）。平成19年度は、100件もの応募が寄せられている。現代GPは毎年いくつかのテーマが与えられているが、平成16年、17年では地域貢献に

次いで二番目の応募件数があり、平成18年度では地域貢献とキャリア育成プログラムに次いで三番目の応募件数があった。e-Learningは教育システムとして、高等教育の現場において関心の高いテーマであるといえよう。

現代GPの採用事例には、本学のシステムにも応用可能なものが多い。そこで、これまでに採用された取組の中から、本学にも関連すると思われる事例を紹介したい。

平成16年度採択案

大学名	テーマ
北海道大学	大学院・社会人教育支援 e-カリキュラム
電気通信大学	専門重視の相互作用型 e-ラーニング実践
横浜国立大学	経営学 e-ラーニングの開発と実践—ゲーミングメソッドを基盤として—
長岡技術科学大学	安全社会を創成する先進技術教育プログラム eSAFE : e-Learning Program for Safety Advanced Frontier Education
信州大学	信州大発“学び”のビッグバンプロジェクト—実績を基盤とした教材の充実と国際化・ユニバーサルデザイン化—
九州大学	WBT (Web Based Training) による医療系統合教育
徳島大学	ユビキタス技術による新しい学習環境の創生
金沢大学	IT教育用素材集の開発とIT教育の推進
佐賀大学	ネット授業の展開
岐阜大学	教師のための遠隔大学院カリキュラムの開発
千歳科学技術大学	新たな情報キャリアアップ教育の実現— e-learning を介した全学情報教育の共有化—
法政大学	新しい国際遠隔教育の構築に向けて—コンテンツ開発とオンデマンド教育—
関西大学	進化する e-learning の展開—授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化—
放送大学	アーカイブズ活用による双方向型遠隔教育
岐阜工業高等専門学校、他2校	単位互換を伴う実践型講義配信事業

平成17年度採択案

大学名	テーマ
東京医科歯科大学	問題解決型自己学習システムの開発と展開
東京外国語大学	e-日本語 —インターネットで拡げる日本語の世界—
東京工業大学	工学導入教育教材の開発
大阪大学	国際的な人材養成に資するコンテンツの開発 (グローバルコンピテンシーの修得を目的とする e-Learning プログラム)
大阪外国語大学	異文化障壁を乗り越える対話と交渉能力の育成—実践的 e-ラーニング言語教育プログラムの展開—

大阪府立大学	看護実践能力の獲得を支援するeラーニング—臨地実習用ユビキタス・オン・デマンド学習支援環境の構築—
北海道情報大学	ITによるIT人材育成フレームの構築—学習者適応型e-Learningシステムの開発—
東京歯科大学	統合型歯科医学教育への新たな展開—系統講義コンテンツを進化させた統合的e-Learning Programの開発—
青山学院大学	e-Learning 専門家の人材育成—世界に通用する専門家育成プログラムの開発と普及—
金沢工業大学	ネット版工学基礎教育センターへの展開
日本福祉大学	福祉人材を育成するeラーニングプログラム—これからの養護学校教諭に求められる能力育成を目指して—
大谷女子大学	実践力をつける実習教育統合支援システム
東海大学福岡短期大学	学びの自由化と個別教育の推進 近未来コミュニティカレッジのためのe-Learningの開発及び展開
高知工業高等専門学校、他11校	創造性豊かな実践的技術者育成コースの開発

平成18年度採択案

大学名	テーマ
信州大学	自ら学び、学び続ける人材育成の基盤形成—教育の質保証を目指したe-Learningによる単位制度実質化—
滋賀大学	知識創造型ユビキタスな学びプロジェクト—携帯電話対応コメントカードシステムを活用した知識創造力の育成—
島根大学	地域医療教育遠隔支援e-ラーニングの開発—地域医療病院・保健福祉施設実習における医学・看護学統合型e-ラーニングシステムの構築—
熊本大学	eLこころ学習プログラムの開発—教員志望のすべての学生にこころの健康一次予防力を養成するe-Learning Programの開発—
鹿屋体育大学	実践的スポーツ指導者教育プログラム—インターン活動を包括的に支えるe-Learningプログラム—
札幌医科大学	高大一貫型プログラムによる効果的職業教育—マイナス1年生から1年生を対象としたITによる基礎保健医療教育の展開—
成蹊大学	進化する教養教育と国際化新人材の育成—基礎力活用による中国語コミュニケーション能力育成展開プラン“遊”—
東京慈恵会医科大学	卒前教育教材から生涯継続学習教材へ—e-Learningを用いた医療系学部地域医療者貢献—
東京理科大学	全人的教養教育の新たな展開—科学者としての良心を持ち、創造的知性を備えた人材の育成—
武蔵野美術大学	造形ファイル—美術・デザイン教育のための知識モジュール群の開発—
早稲田大学	実務・研究力を高める次世代型教育システム—学習環境基盤としてのe-learningから大学改革基盤としてのe-learningへの発展的利用—
大島商船高等専門学校	実学重視のe-ラーニングサイト構築と展開—即戦力となる実践技術者養成を目指して—
東京学芸大学、他4校	教員養成のためのモジュール型コア教材開発—大学連携による臨床・実践・IT領域e-Learning用教材の共同開発—

図表7 現代GP採択事例

(1) 横浜国立大学の事例

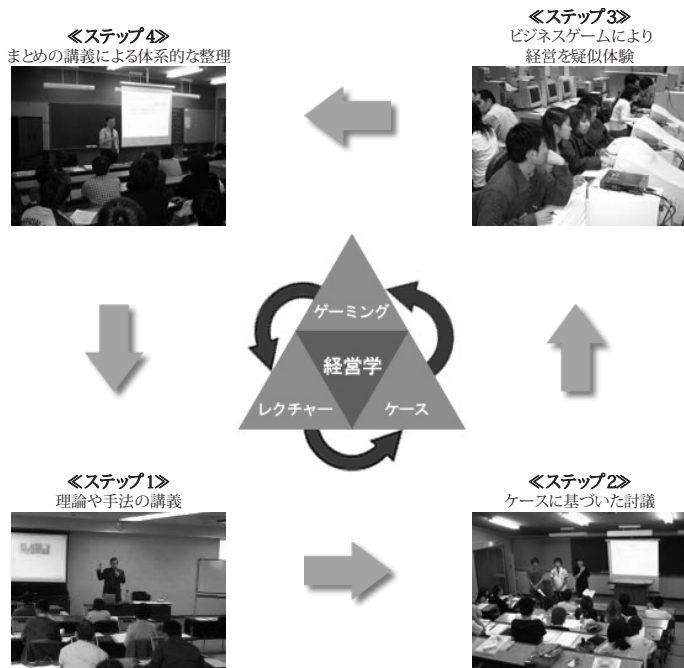
横浜国立大学では、平成16年度に「経営学eラーニングの開発と実践—ゲーミングメソッドを基盤として—」というテーマで取組が採択されている。この取組は、従来からの講義形式による教育形態、ケース・スタディに加えて、体験学習である「ゲーミングメソッド」を用いている。体験学習は「することから学ぶ (Learning by Doing)」と言われるように、自己の体験的活動から事実や法則を修得したり、新しい考え方やスキルを獲得したりする学習形態である。特に経営学分野では「ビジネスゲーム」という特徴的な形態が知られている。

同大学では、このゲーミングメソッドを基盤とし、インターネット技術によって実現される「経営学eラーニング・プログラム」を開発・実践し、従来の講義、ケース、に加えて、ビジネスゲームによる体験学習の三位一体化により教育改革を行ってきた。

この取組には、経営学部が長年にわたって実践してきた「会計CAI (コンピュータ支援教育)」「ERP (企業統合情報システム)」「ビジネスゲーム」などの経営学教育の知識やコンテンツが盛り込まれている。同大学によれば、経営学部の学生による授業評価アンケートでも高い評価を得ており、教養教育の一環として他学部への公開も始まっているという。

選定理由としては、教育コンテンツがすでに開発されていることやゲームのシステムを自力で開発している点などが評価されている。

同大学の取組は、インターネットを活用した教育をインターネット上だけで終わらせているのではなく、教育効果を高めるために、教室における講義と組み合わせて展開している点にあるといえるだろう。



図表 8 横浜国立大学の取組例 (<http://ybg.ac.jp/gp.html> より転載)

(2) 北海道情報大学の例

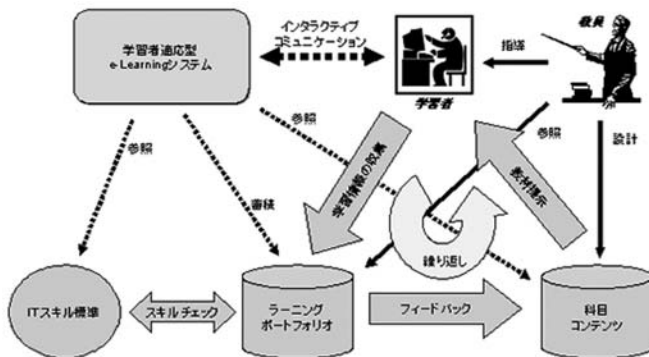
北海道情報大学は、平成17年度に「ITによるIT人材育成フレームの構築 —学習者適応型e-Learningシステムの開発—」というテーマで取組が採択されている。この取組は、IT企業が求めている。1) 顧客の経営課題を認識し的確な解決策を提示できる人材、2) 高度なIT技術のスキルを保有し適用できる人材の育成のために、経済産業省が策定した「ITスキル標準 (ITSS)」のアプリケーションスペシャリスト育成を目標としている。

具体的には、学習者の能力に適応できるe-Learningを、北海道情報大学の運営グループ内のIT企業及びITSS策定普及関係者と連携して開発・

運用・評価を行っている。その手段として、学生の学習スキル情報であるラーニングポートフォリオを活用したe-Learningを正規授業に取り入れるとともに、IT企業と連携して企業のシステム開発の体験を織り込みながら総合演習を実施し、高度IT人材育成をめざした教育を実践しているというものである。

選定理由としては、IT技術者に望まれているスキルに基づき、最低限の科目に絞ってe-Learning教材を開発する計画であり、e-Learning教材による学習の後、企業との連携による演習を取り入れることにより、e-Learningによる学習の成果を実務的経験に結びつける点に特徴が感じられる。また、この取組に対して、教育高度化推進協議会が評価結果の公表を前提に評価を実施することが読み取れるといった内容が挙げられている。

学生のカルテとも言えるラーニングポートフォリオを中心として、学生のレベルにあった学習が展開されている点と、特定の目的に絞った特徴のある教育方法が評価されているといえよう。



図表9 北海道情報大学のe-Learningシステム
(<http://www.do-johodai.ac.jp/topics/GP/index.html> より転載)

(3) 信州大学の例

信州大学は、平成18年度に「自ら学び、学び続ける人材育成の基盤形成—教育の質保証を目指したe-Learningによる単位制度実質化」というテーマで取組が採択されている。この取組は、大学教育の質保証は社会の強い要請であるという前提の下、多様な入学生に単位制度実質化を図り、きめ細かな学習指導を行い、教育の質を確保し、自ら主体的に学び、学び続けられる人材を育成することを目的としている。

このような目的を達成するために、e-Learningを活用して自学用モジュール教材を作成し、理解度確認小テストを多く提供することで、形成的評価を中心とした丁寧な学習指導を可能にする。さらに、学生の適切な授業科目選択を支援する映像化授業カタログを提供する。加えて、全ての学生に対して確かな教育成果を保証するために、教員と学生の誰もが容易に利用可能な利便性の高いシステムを整備する。本取組を通じて作成された数多くの自学用モジュール教材や形成的評価用のテスト問題だけでなく、取組のノウハウまでを広く国内外の大学が利用可能にするというものである。

選定理由としては、学生の予習復習時間の不足という、恒常的問題に対して、現実的なソリューションを示している点が高く評価されている。ほとんどの大学等で問題と考えていることに、具体的、現実的方法を示している点も評価されている。また、単位制度実質化という考え方は、大学教育の本質的に重要な部分であり、波及効果も期待され、特に、教材をモジュール化することで高学年進級後も再度の内容チェックが可能になる点は、有効性が高いとされている。

同大学は長年e-Learning教材の開発を行っており、取組においては教材作成センターを設置して学生と協同して教材開発も行っている。教材は、工学系の科目が多いが、英語など他の領域の教材開発も幅広く行われている。教材開発に当たって学生を巻き込んでいる点、授業の質を確保しながら

ら単位を付与する仕組みであるという点, 当初から教材やシステムといった成果の外部公表・共有を念頭に置いている点などが同大学独自の点といえよう。



図表 10 教材作成センターの概要

(<http://sugp.int-univ.com/GPHP/>より転載)

Ⅲ 現状の研究ゼミ教育における課題とグループウェア

以上で述べたように、高等教育におけるIT活用は主として授業の補助や代替えに利用されている。しかし、ITの持つコミュニケーション機能を有効に活用している例は非常に少ない。また、コミュニケーション機能を積極的に活用している事例においても大学のゼミ教育に活用している例は皆無である。そこで、筆者らは、大学のゼミ教育に強力なコミュニケーション機能を持つグループウェアを導入することについて基本的な検討を行ってきた^[1]。その結果を以下に紹介する。

東京富士大学経営学部では2年次以降の3年間、担当教員と少人数の学生による双方向のコミュニケーションを通じた研究ゼミ教育を中心にカリキュラムが構成されている。体育祭や文化祭においても研究ゼミは参加単位のひとつであり、本学において最も重要な授業と位置づけられている。

しかし、正規のカリキュラムにおいては週1日、80分の時間が割り当てられているのみで、ゼミ発表大会の直前の準備、学園祭の準備、卒業論文執筆の相談など、十分なディスカッションや教員からの指導が必要である時

期には、きめ細かな指導がなかなかできないのが現状である。また、開学から5年間を経て、ゼミによって人数のばらつきが見られるようになり、人数の多いゼミでは30人近い学生を抱えるようになっている。人数の多いゼミにおいては、普段のゼミにおいても学生とのコミュニケーションには限界がある。

学生との時間を確保する目的で、本学では正規の授業時間外、4時限と6時限の間の時間帯にコミュニケーションアワー（16：10～18：10）を設け、就職指導、資格取得指導、クラブ活動等にあてている。しかし、この時間帯はクラブ活動や就職講座、資格講座等に参加する学生も多く、この時間をゼミ活動にあてることは実際に難しく、結局は週1日、80分の時間内に全てのゼミ活動を行わなければならないのが現状である。

著者らの研究では、英国のOpen University、玉川学園のCHaTNetなどで実績のあるFirstClassを採用して、ゼミ教育の活性化の可能性を探ってきた。これまでの研究において、グループウェアの導入により、期待された効果としては以下の通りである。

- ① 授業時間に関係なく、学生・教員がグループウェアにアクセスし、コミュニケーションを行うことができる。（時間的ギャップの補完）
- ② 自宅からでもアクセスできるため、教室に集まらなくとも様々な場所からコミュニケーションを行うことができる。（空間的ギャップの補完）

つまり、グループウェアをゼミ教育の現場に導入することにより、時間・場所を問わないユビキタスな環境を提供できるのである（田畑、広瀬、武藤、安田、2006）。

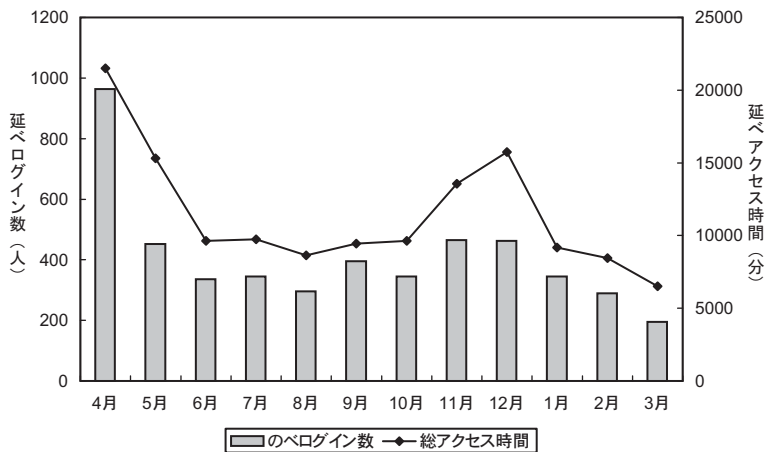
IV グループウェアにおける参加者の利用状況

グループウェアの機能としては、①メッセージング機能：教員と学生、

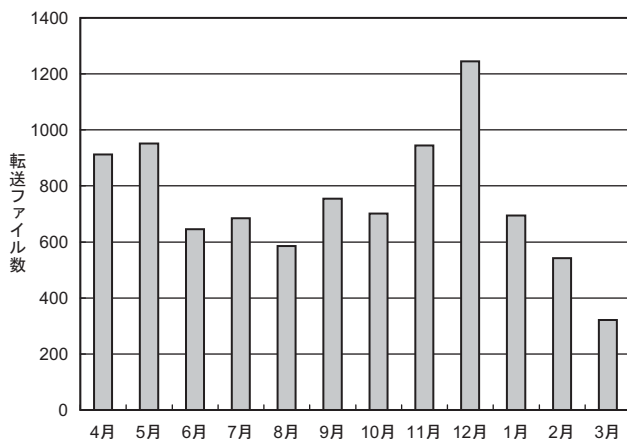
あるいは学生どうしが相互に直接メッセージの授受を行う、②会議室・掲示板機能：学生と教員の間で研究ゼミの学習内容に関する情報の交換や情報共有を行う、③ストレージ機能：研究ゼミの活動で利用するファイルの交換・共有を行う、④スケジュール機能：研究ゼミ内でのプロジェクトや各種行事のスケジュールを共有するといったものがある。

当初の研究では、予算や研究協力者の都合からサンプル数が少なかったが、継続的な研究の結果、教員8人、学生195人が参加するまでになった。その結果、利用者の感想といった定性的な分析だけでなく、ログの解析を通じた利用者の同行といった定量的な分析が可能になった。

まず、月ごとのアクセス状況を見てみた。4月のアクセスが非常に多いのは、多くのゼミにおいてFCの導入教育が行われているためだと思われる。最終学年の利用が少なくなる3月を除いては、ほぼ安定したアクセスがある。この状況は、ファイルの転送数を見ても明らかである。4月、5月の導入期に転送ファイル数が多く、学生がシステム学習のためにファイルのやりとりをしているのがわかる。特筆すべきは11月、12月のゼミ発表会直前であり、この時期のファイル転送数が年間を通じて最も多くなっている。ゼミ発表大会は、本学ゼミ教育における一大イベントとして位置づけられているが、プレゼンテーション用の資料作成にグループウェアが活用されていることがわかる。



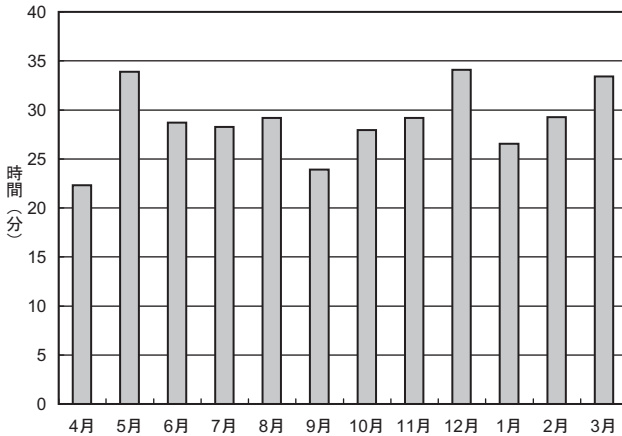
図表 11 月別のアクセス状況



図表 12 月別のファイル転送数

次に、参加者が月にどれくらいの時間、グループウェアにアクセスしているかを見てみた。先ほどのアクセス状況とは異なり、一年を通して安定

したアクセスのあることがわかる。ゼミの会議室では、ゼミの連絡などが行われており、休み期間中であっても課題やイベントの連絡が可能であることから、定期的にログインする習慣のある学生がいる。



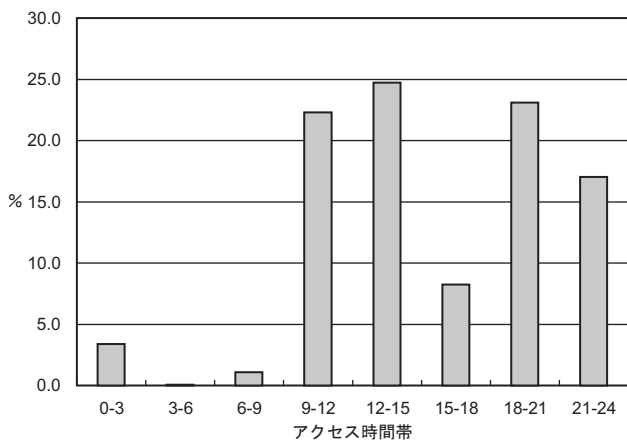
図表 13 月あたりの個人平均アクセス時間

さらに、参加者がどのような時間帯にアクセスしているかを調べてみた。一日を通して昼間の時間帯と深夜の時間帯とでアクセスが増えている。昼間の時間帯は、授業においてFCを活用していたり、自由時間や自宅からFCにアクセスしている状況が考えられる。18時～21時は、授業時間中ではあるが昼間主の学生のアクセスも考えられる。実際の運用においても参加者全体では、昼間主の学生の方が人数が多い。さらに、21時～24時もアクセス時間が長い時間帯である。夜間主の学生で、この時間帯にアクセスしている学生も見られる。

このように、ログの解析を行った結果、参加者が授業期間だけでなく休業期間中もグループウェアにアクセスしており、授業時間帯以外にもシステムを活用していることがわかった。つまり、本学におけるグループウェア、ファースト・クラスの導入により、時間と場所の制約を超えてユビキタス

な環境でゼミ教育が行えるようになったのである。

FCを活用している教員や学生にとって、学生発表大会やゼミ合宿といったイベントをこなすためにグループウェアは必要不可欠な存在となっている。



図表 14 時間帯別アクセス時間

V ゼミ教育におけるグループウェアの可能性

これまでの結果から、グループウェアの有効性が明らかにされた。さらに、グループウェアを有効に運用するための可能性について述べたい。

これまで、FCにおいて提供されてきた情報は、学生がそれぞれ所属するゼミの活動が中心であった。本学においてはゼミ活動は学生生活の中心であり、日常生活や就職活動にも直結しているといえよう。日常生活や就職活動は、ゼミを担当している教員がそれぞれ個別に会議室などで情報提供しているのが現状である。そこで、現代GPなどで他大学が行っている取組などから、グループウェアの有効性を高めるためにどのようなことが

可能なのかを考えてみたい。

ゼミの教育効果を高めるためには、横浜国立大学で見られるように、授業に関連した素材をグループウェアに導入することも考えられる。本学のゼミ教育では三学年が同時に受講するというスタイルをとっているために、かねてより学年間の知識格差がゼミ運営の障害として指摘されてきた。それぞれのゼミにおいて各学年に求められる最低限の知識を、それぞれの学生が必要に応じて学習することができれば、実際の授業においてより本質的な議論を展開することができるようになる。

また、グループウェアを使いこなすためには、グループウェアの知識だけでなく、ワープロ、表計算、プレゼンテーションといった各種の基本ソフトに関するリテラシーも必要になってくる。ファイルがグループウェアにアップロードされていても、ファイルを展開できなかったり、使いこなせないといった学生が年度の初めには数多く見られる。

コンピュータのリテラシーは、大学卒業時においては前提とされている。北海道情報大学において展開されているようなシステムを組み込めれば、学生の学習レベルに応じてITに関する技術を学べる。ITのリテラシーは、ゼミ教育という観点だけでなく就職活動においても機能するといえよう。

最後に、学生ポータルとしてのグループウェアについて指摘しておきたい。先にも述べたように、ゼミは本学学生における重要な準拠集団であり、ゼミ活動以外にも様々なイベントについて協同学習を行っている。現在は、学生生活や就職活動など、ゼミ単位で行われている活動や情報提供には、グループウェアで共用できる情報も多い。教員が提供したい情報や学生からニーズの高い情報をまとめて学生に一括して提供できれば、グループウェアの機能をより有効に使いこなすことができるようになる。

VI むすびにかえて

本研究では、研究ゼミ教育の充実をはかるために、授業時間の不足を補い、またゼミ内における「学生間」「学生と教員間」の時間と場所のギャップをこえてコミュニケーションを活発に行うインフラを提供するための手段として「グループウェア」の導入を試みてきた。

まず、高等教育におけるIT教育の現状について独立行政法人メディア教育開発センターのデータと現代GPの採択事例を用いて紹介した。直近の資料によれば、大学内外で講義の受講が可能な「e（イー）ラーニング」を導入する大学が平成18年度、国公立大の約4割に上り、急増していることが、メディア教育開発センターの調査で明らかにされている。18年度でeラーニングを導入しているのは298大学で、14年度の129大学から2倍以上に増えている。また導入した大学側にとっては、時間の制約が多い社会人の取り込みも狙える利点が指摘されている。

次に、本学において導入済みのFCのログ解析を通して、ゼミ教育におけるグループウェアの有効性を明らかにした。これまでゼミを指導する教員側からの定性的な有効性は明らかになっていたが、今回の分析によって定量的な有効性も明らかになった。

グループウェアをゼミ教育の基本的なシステムとして活用し、講義科目、就職活動、学生生活といった多様なコンテンツを提供することで、優れたゼミ教育が展開できると同時に、大学における独自の教育プログラムとして外部にも情報発信できるようになる。

今後の課題としては、ログ解析の精緻化が挙げられる。今回の分析では、参加者全体をまとめて分析にかけている。しかし、実際にはゼミによって使用している教室や時間帯は異なっている。昼間主や夜間主の別などと併せて、データを詳細に見ることによって、利用者の特徴をより一層把握で

きるようになるだろう。

付 記

本稿は、本学の共同研究によるものである。

文 献

- [1] 田畑 智章, 土井充, 広瀬 盛一, 武藤 篤生, 安田 賢憲, 「多目的ビジネス・ゲームの開発」, 『富士論叢』, 第48巻, 第一号, pp.1-24, 2003年。
- [2] 田畑 智章, 広瀬 盛一, 武藤 篤生, 安田 賢憲, 「グループウェアによるゼミ内コミュニケーションの支援に関する研究」, 『富士論叢』第51巻, 第一号, pp.147-167, 2006年。
- [3] Geoff Aldridge, 「FirstClass Case Study : FirstClass helps students to communicate and develop an online community at The Open University」, Open Text Co. (<http://www.firstclass.com/casestudies/DistanceEd/Open%20University>, 2006/03/28閲覧)。
- [4] Open University, 「The Open University ホームページ」, Open University (<http://www.open.ac.uk/>, 2006/03/28閲覧)。
- [5] 波里純次, 「三位一体の教育に生かすグループウェアの活用」(リーフレット), (株)エフ・シー・マネジメント (http://www.fcm.co.jp/firstclass/solution_e/j01.pdf, 2006/03/28取得)。
- [6] 玉川学園, 「CHaT Netホームページ」, 玉川学園 (<http://chatnet.jp/default.htm>, 2006/03/28閲覧)。
- [7] (株)エフ・シー・マネジメント, 「FirstClassパンフレット」, (株)エフ・シー・マネジメント, 2005年。
- [8] Open Text Co., 「FirstClassホームページ」, Open Text Co. (<http://www.firstclass.com/index.shtml>, 2006/03/28閲覧)。
- [9] ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org>, 2007/04/27閲覧)。
- [10] 横浜国立大学, 「横浜国立大学経営学部 現代GP成果報告会」, (<http://ybg.ac.jp/GP>, 2007/05/02閲覧)。
- [10] 独立行政法人メディア教育開発センター, (<http://www.nime.ac.jp/reports/001/2005/main.html>, 2007/05/02閲覧)。
- [11] 北海道情報大学, 「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」ホームページ, (<http://www.do-johodai.ac.jp/topics/GP/index.html>2007/05/02閲覧)。
- [12] 信州大学, 「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」ホームページ,

(<http://sugp.int-univ.com/GPHP/2007/05/02>閲覧)。

- [13] 「ネットで講義，質問はメール 「eラーニング」急増」、『産経新聞』，東京朝刊，第3社会面，2007年05月02日，p.25。

執筆 者 紹 介

網 本 尚 子 東京富士大学教授
円城寺 敬 浩 東京富士大学准教授
太 田 さつき 東京富士大学准教授
岡 村 一 成 東京富士大学教授
田 畑 智 章 東京富士大学准教授
土 井 充 東京富士大学准教授
広 瀬 盛 一 東京富士大学准教授
武 藤 篤 生 東京富士大学教授
安 田 賢 憲 東京富士大学短期大学部准教授

編 集 委 員

網 本 尚 子 (委員長) 井 手 健 二
浮 谷 秀 一 小 川 達 也
蘇 畑 卓 郎 広 瀬 盛 一
藤 尾 美 佐

富 士 論 叢 第 52 卷 第 1 号 (通卷 89 号)

平成 19 年 9 月 25 日 発行

編 集 東京富士大学富士論叢編集委員会

発 行 東京富士大学学術研究会

代表者 岡 村 一 成

東京都新宿区高田馬場 3 - 8 - 1

☎ 03 - 3368 - 2154

印刷者 豊 文 社 印 刷 所

編集後記

- 第52巻第1号が無事刊行の運びとなった。ご投稿いただいた方々、また、さまざまにご尽力いただいた方々に、心より感謝申し上げたい。
- さて、2007年になって、能登半島地震、中越地震と大きな地震が続いた。夏の初めに深刻な大雨被害があったかと思えば、真夏には酷暑とも言うべき暑さが続き、多数の死者が出たという。
- このような自然の脅威にさらされると、月並みではあるが、人間の存在の小ささ、無力さを思わずにはいられない。大いなる自然の前では、人間のいかなる抵抗も無駄である。だが、だからといって無常観にひたすらとらわれているわけにもいかない。人間と生まれたからには、たとえ微々たるものであれ、前進しなければならないのではないだろうか。
- 無力感に襲われるのは、自然に対する時だけではない。思い通りに事が進まない時、他人と意思の疎通が図れない時などに感じる、まるで深い淵に引きずり込まれるような絶望感は、誰しも一度は経験があるものだろう。
- 私が日常の中で最もこの無力感を感じるのは、実は講義をしている時である。講義中の無反応な学生の態度、講義内容をまったく踏まえないデタラメな書き方のレポートの山、無視される課題。こうした事実と直面すると、たとえ一時間の授業でも、まるで一日分の仕事をこなしたかのような激しい疲労を感じることとなる。
- そうした無力感、疲労感と戦い続けた春学期を終え、研究に専念できる夏休みを持てることは、無上の喜びである。ここでリセットし、研究者としての自分のアイデンティティを取り戻し、再び秋に教室へと戻っていくのである。
- 考えてみれば、我々に脅威を与える大自然と比べれば、学生たちなどそよ風のようなかわいい存在である。自然の脅威でさえ知恵と技術で克服してきた人間の歴史からみれば、無気力な学生に対峙することなど何ほどのことであろう。かくして、リフレッシュした頭と身体で、学生たちを講義に惹きつけるためのあの手この手の奮闘の日々が、再び始まることとなる。

(網本 尚子)

参考文献

◎台本

- 天理本 北川忠彦他校注『天理本 狂言六義上下』（平成六～七年 三弥井書店）
虎明本 池田広司他校注『大蔵虎明本狂言集の研究上中下』（昭和四十七～五十八 表現社）
大蔵流 小山弘志校注『狂言集（日本古典文学大系 上下）』（昭和三十五～三十六年 岩波書店）
和泉流 野々村戒三他編『狂言集成』（昭和四十九年 能楽書林）

◎資料

- 古川久他編『狂言事典 事項編』（昭和五十一年 東京堂出版）
小山弘志編『能・狂言Ⅶ 狂言鑑賞案内（岩波講座）』（平成二年 岩波書店）
小林責監修『狂言ハンドブック』（平成七年 三省堂）

現在では和泉流のみで上演される曲で、天理本では現行とあまり変わらない形で載せられているが、虎明本では、何某と知人という設定となっている。また大蔵流では、虎明本以降の諸本には見られない。

確かに、法螺を吹き合うだけの話であるから、知人という設定で十分である。ここをあえて和泉流が伯父と甥にした意味を考えると、狂言における伯父の役割がよりあきらかになるのではないだろうか。また、「鱸庖丁」との先後関係、影響関係の有無なども、考えてみなければならぬ問題であるだろう。

八 最後に

以上、本稿では、「伯父」の登場する狂言の内容を整理し、役柄や設定などによる若干の分類を試みた。中には、その役が伯父であることの必然性があり感じられない場合もあり、なぜそれをあえて伯父としたのかを考察することにより、狂言で伯父を登場させる意義が明確になる可能性が考えられる。また、中世説話や、歴史資料に見られる伯父と甥の関係も視野に入れ、中世期における伯父の概念に何か顕著なものが見られるかどうか、またそれが狂言にどのような影響を及ぼしたのか、も考えなければならぬだろう。さらに、伯父の登場する狂言の成立年代、主従や夫婦など、他の人間関係を描く狂言との先後関係なども考えてみたい。

今後は、今回の整理を踏まえ、より踏み込んだ考察をしていきたいと考えている。

なかつたり、といった、傍若無人な悪太郎の姿は描かれている。

「悪太郎」という狂言を観客の立場で見ての印象は、演者による違いもあるが、和泉流の場合は、堅物の伯父に反発する甥の暴走といった印象を、一方大藏流の悪太郎からは、伯父に対してとことん甘える、乱暴者の稚気といった印象を受ける。

和泉流では先述の通り、はじめから悪太郎が、自分を陰で非難する伯父を脅すために出かけており、長刀を伯父の前で振り回して怖がらせる演出が入ることもその印象を強めている。また、和泉流の伯父は、悪太郎に強く意見をすることはなく、しきりに悪太郎をなだめるばかりだが、大藏流では悪太郎に禁酒を強要し、悪太郎もそれを一度は承知する。だが、人生最後の酒を飲ませてほしいとねだり、結局は大盃で何杯も飲んでしまう。さらに伯父は酒にひどく酔った甥に対して、露骨に顔をしかめてみせる、という演技も見られる。

和泉流は、抑圧されていた分怒りも大きいのか、伯父は、道端で寝込んだ悪太郎の髪も髭も剃り落としてしまう。そのため目覚めた悪太郎は己の風貌の変化に気づいて、大いに反省するのだが、大藏流の方は髪も髭もそのままなので、悪太郎にもわけがわからず、帰宅してもう一杯飲もうと言いつつ出ず展開となる。出家する段も、和泉流ほど真剣な思入れは感じられない。

「悪太郎」は、このように流派により演じ方の違う曲であるが、大酒を飲む悪太郎をいさめる、という伯父に託された役割は同じと考えられるだろう。

さて、先述の「鱸庖丁」と類似した趣向を持つ曲に「謀生種」がある。嘘が上手な伯父にいつもだまされる甥が、伯父に対抗するために法螺話をしに行く。しかし、伯父は甥の話を上回る法螺話を披露して、甥を言い負かす。甥が、話のうまくなる秘訣を尋ねると、ほうじょうの種というものが庭に埋めてあると言って、甥に穴を掘らせ、何も無いのがほうじょうの種だとからかう、という話である。

て落としてしまい、主にみつかるという話である。

虎明本、天理本ともに載せられているが、現行のように、主が土産を買ってきたくないばかりに、太郎冠者に供はまだ決まっていけないと言わせるような設定はない。

以上、使い先として設定された伯父の例は三例である。単に設定としてだけではなく、伯父宅での伯父と太郎冠者とのやりとりが重要となるため、舞台上に伯父を登場させているのである。また、「止動方角」や「素袍落」では、伯父の登場によって、気が利かないとか、吝嗇であるとか、人使いが荒いなどという主の人物像を際立たせようとする意図もあるのが感じられる。

七 「悪太郎」と「謀生種」

最後に、これらの分類以外で伯父と甥が登場する作品を二曲見てみよう。

まず「悪太郎」である。酔った悪太郎が、さらに酒をねだろうと（和泉流では、酒を飲むのを伯父が非難するので、脅してやろうと）伯父の家に押しかける。伯父は悪太郎に酒を飲ませて帰らせるが、あとをつけて行き、途中で酔いつぶれて寝込んでしまった悪太郎を僧形にし（和泉流では髪と髭も剃り）、汝を南無阿弥陀仏と名づける、と言いつぶれて去る。その後は、目を覚ました悪太郎が、出家が念仏を唱えながら歩くのに対して、自分の名が呼ばれたと思つて返事をし、出家の話聞いて仏道修業に励むことを誓う、という改心の話となる。

虎明本では、詳しい台詞の記載は悪太郎が出家と出会う場面以後のみで、悪太郎と伯父の関係についての具体的な記述はない。天理本も、現行曲の設定にあるような、伯父を脅そうという意図までは詳しく描かれているわけではない。だが、長刀についての伯父の誉めようが悪いとからんだり、帰らせようとする伯父に対してなかなか退出し

た甥に対して、伯父が機知に富んだ制裁を加えた、という設定である。

六 使い先として設定された伯父

次に、第四で上げた、台詞の中だけに登場する伯父の場合と同様に、太郎冠者の使い先として設定されているが、実際に太郎冠者が伯父宅へ行くところまで描かれる曲について整理してみる。

まず、「木六駄」では、木六駄と炭六駄を十二頭の子牛に付け、大雪の中、峠を越えて都の伯父の元へ使いに出された太郎冠者が、峠の茶屋でこれも届けるはずであった酒樽をあけて飲んでしまい、木六駄を茶屋にやって、炭六駄だけを伯父の元へ届ける。主からの手紙に木六駄を贈ったとあるのを読んだ伯父が、太郎冠者に尋ねると、木六駄とは自分の名前だと言いつつ酒を飲んだのがばれ、伯父に叱られる、という話である。最後のいわゆる才子のために、ここは伯父を登場させ、太郎冠者と会話させる必要があったわけである。なお、「木六駄」は、大蔵流の古い台本には見られない。天理本には、現行とあまり大きな違いのない形で載せられている。

「正動方角」では、太郎冠者が、茶比べに使う茶、太刀、馬まで伯父に借りに行かされる。人使いが荒く、太郎冠者に対しても思いやりの見られない主に対して、伯父はよくできた人物で、すべての道具を快く貸し与える。結局、借りてきた馬は咳をすると暴れる馬で、呪文を言わないと鎮まらないのだが、そのことを知らない主を何度も落馬させ、太郎冠者が溜飲を下げる、という展開になる。この曲も、虎明本、天理本ともに、現行と大きな違いはない。「素袍落」は、急に伊勢詣でに行くことにした主が、太郎冠者に、伯父を誘いに行かせる。伯父は同行を断るものの、太郎冠者が供をすると察し、酒を飲ませ、餞別に素袍まで与える。主から、土産を買って帰るのが大変なので、餞別をもらわないよう、供はまだ決まっていなと言え、と命じられていた太郎冠者は、素袍を隠すが、酔っぱらっ

定)、連歌会の宗匠を頼むために都の伯父を太郎冠者に呼びに行かせる(察化)、痺れが起こって使に行けないと仮病を使う太郎冠者に、病気ならば伯父からの振る舞いに連れて行けないと言つて主がだます(痿痢)、借りていた太刀を伯父の元へ太郎冠者に返しに行かせる(腥物)、主に黙つて都見物に行つた太郎冠者が、伯父の家に寄つてご馳走になつた話をする(文蔵)、というふうには、太郎冠者がシテで、主の伯父宅を太郎冠者の使い先や立ち寄り先などに設定し、話を進めるための道具立てとして使う場合を指す。

「釣狐」は、狛師に狐釣りをやめさせるために、狐が狛師の伯父である伯蔵主に化けて出るといふ特殊な設定で、本物の伯父と甥ではないことから、一応ここに分類した。

五 伯父がシテとなる狂言「鱸庖丁」

次に、伯父が舞台に実際に登場する曲に目を転じてみることにする。

伯父がシテとなる曲は、「鱸庖丁」一曲のみである。この曲は、甥が伯父に祝宴用の鯉を求めてくるよう命じられるが、まだ準備できていないので、鯉を淀の橋杭につないでいたところかわうそに食べられた、と嘘をつく。しかし、これが嘘だと見抜いた伯父は、こらしめるために、鱸を料理する様子の真似だけを甥に見せ、口先だけでもてなし、鯉をかわうそが食べたのと同じように、鱸もほうじょう(嘘の意)という虫が食べたので、料理を食べたつもりで帰れ、と甥を追い返す、という話である。

この曲は、虎明本、天理本、ともに載せている。虎明本では甥は伯父を評して「あのおぢじや人は、たらしよひ人じや程に」と述べ、また天理本でも嘘をつく甥に対して伯父が「扱々にくい事かな、いつもわたくしをうつけにして、あのやうな事を申てまいる」と述べている。日頃から無責任な言動が多く、伯父をないがしろにしがちだつ

三 伯父の登場する狂言

以上見たように、狂言では血縁関係の描かれることは少ないのだが、親子が約十曲、祖父と孫、兄弟がそれぞれ三曲ずつしかないのに比べ、「伯父」が出てくる曲は現行曲中十一曲もあり（実際に舞台上には登場しないが、台詞の中に出てくる場合も含める）、意外に多いことがわかる。ちなみに、伯母と甥の登場する曲は、現行曲では「伯母ケ酒」一曲のみである。

では、狂言の中で描かれる伯父はどのような人物なのであるうか。また、一曲の中で、どのような役割を持っているのだろうか。本稿では、伯父が出てくる狂言の内容を整理し、分類を試みたいと思う。

なお、伯父が登場する現行曲は以下の通りである。

悪太郎、木六駄、止動方角、素袍落、鱸庖丁、謀生種ほうじょうのたね（和泉流）

伯父が台詞の中でのみ登場する現行曲は以下の通りである。

栗焼、察化（咲華）、痿痢しびり（痿痺、痺）、釣狐なまくさ、腥物（和泉流）、文蔵

四 台詞の中だけに登場する伯父

まず、舞台に登場せず、台詞の中だけに登場する曲についてである。これは、丹波の伯父の元から送られた栗を、太郎冠者に焼き栗にさせる（栗焼、『狂言集成』による。大蔵流では、伯父ではなく知人から栗が送られてきた設

この他、先述の通り、簪入りで妻が付き添う場合には、簪と舅、夫婦だけでなく、妻とその実の父という親子関係も描かれているとみなせる。また、夫婦の狂言で、夫婦のもめ事に妻の父親が介入する場合もあり、その場合も、夫婦と同時に親子関係が描かれていると言える。

次に祖父と孫、兄弟の登場する曲を上げてみることにする。

祖父と孫が登場する曲は三曲である。「腰祈」は山伏が祖父の家に立ち寄り、祖父の曲がった腰を祈って直そうとするが失敗する話、「枕物狂」は祖父が若い女性に恋をしたのを、孫二人が取り持つてやる話である。

長寿の人に名前を付けてもらうことを縁起がよいとして喜ぶ風習を基に、「財宝（才宝）」という曲が作られている。孫三人が祖父に名を付けてもらいに行き、珍妙な名と祝儀をもらうのだが、類曲には「比丘貞」がある。これは男が老尼に息子の名を付けてもらう設定で、「財宝」の設定を女性に移したものである。ただし、この老尼が子どもの祖母であることを示す台詞はないので、今回の家族関係の曲からは除外する。

兄弟の登場する曲も、わずか三曲である。

まず「舎弟」では、舎弟の意味がわからない弟が、舎弟とは盗人のことだと教えられ、いつも自分を舎弟と呼んでいる兄にくってかかり、兄弟喧嘩となる。

「梟（梟山伏）」では、梟に取り憑かれた弟を心配し、山伏に祈祷を頼む兄が登場する。

「松囃子」（和泉流）では、年頭の祝祷芸能である松囃子が廻ってくるのを待ちこがれる兄弟が描かれている。

このように見ると、祖父と孫が出てくる曲では、年をとった祖父の動きや台詞の言い回しのおもしろさと、祖父をいたわる孫を描く、というパターンがある程度捉えられるが、兄弟の出ってくる曲には明確なパターンがないことがわかる。

二 狂言に見られる家族関係

②血縁関係

一方、血のつながった関係、親子や祖父母と孫、兄弟といった関係の登場する曲は、さほど多くはない。親が生気な息子にいろはを教える「以呂波（伊呂波）」は有名だが、「口真似」と同工異曲で、大藏流で狂言師の初舞台としてこの曲が演じられる事実からいっても、太郎冠者で演じても別にかまわない趣向を、子どもに置きかえただけの作品と言える。

親が子を仏像や柑子の詰まった俵に仕立てて、人をだまそうとする「金津（金津地蔵）」や「柑子俵」（和泉流）は、子どもを道具として描いている例。これも子方のかわいらしさ、けなげな演技を見どころとして作られた曲である。親子という関係が、話の成立上絶対に必要となっている曲として、「牛盗人」（和泉流）と「鶏猫^{けいみょう}」が上げられる。これは、牛を盗んだ、あるいは猫を殺した犯人として、子どもが実の父を訴え出るが、褒美として父の助命を願ったため、権力者の感涙を誘う、という類曲である。すでに知られていることだが、「鶏猫」の中で語られる羊盗人の故事は、能の番外曲「羊」とほとんど同じであり、「鶏猫」は能「羊」を狂言化したものと言える。理屈っぽく、笑いの要素の少ない曲調からいっても、こうした親子の描き方が狂言独自の創作とは到底考えられない。

同じく能の影響を受けて作られた曲に「唐人子宝」（和泉流）がある。九州箱崎で日本人に仕える唐人の子ども二人が来日し、父の帰国を願う、という筋は能「唐船」と類似しており、「唐船」の狂言化と考えられる。

「業平餅」では父親と醜女の娘が登場する。同じく娘を溺愛する父親は「首引」にも登場するが、これは鬼の親子である。さらに異色なのは「雪打」（和泉流）で、僧侶とその隠し妻と隠し子が登場する。

伯父が登場する狂言

網本 尚子

一 狂言に見られる家族関係

①夫婦と舅・贅

狂言に見られる登場人物の関係は、圧倒的に主従関係が多い。主と太郎冠者、あるいは主のかわりに大名や有徳人と太郎冠者（場合によっては次郎冠者、三郎冠者）の関係がそれにあたり、僧侶と新発意もこれに近い関係とと言えるだろう。

では、狂言では、家族関係はどのように描かれているのだろうか。

最も登場することの多い関係は「夫婦」で、「鎌腹」や「花子」のように夫婦喧嘩を描いたものや、「因幡堂」や「石神」のように離縁にまつわる話、夫婦で力を合わせて商売をする「今神明」（和泉流）など、現行曲中約三十曲で夫婦が登場する。

また、「舅と贅」の関係も多く登場するが、これは「贅人狂言」という典型があることを考えれば、当然のことである。十数曲ある贅人狂言の現行曲は、ほとんどが同じパターンのもので、時には贅が妻を伴って贅入りの挨拶に行く設定や、贅が帰宅して妻と会話する設定もあり、その場合は、夫婦の関係も同時に描かれているとみなすことができる。